

外道魔術師の一目惚れ

シークレット/K

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天の智慧研究会、第二団【地位】として活動するシユバルゴ||モータナスは、外道魔術師として異端にも、結婚願望があった。

潜入した帝都にて目にした少女に惚れた時、彼の物語は加速する——！

目次

第一話	1
第二話	15
第三話	23
第四話	29
第五話	38
第六話	46
第七話	55
第八話	65
学院襲撃事件（二卷）	
第九話	73
第十話	80

第十一話	89
第十二話	103
魔術競技祭（二卷）	
第十三話	120
第十四話	132
第十五話	143
第十六話	160
第十七話	170

第一話

アルザーノ帝国、帝都オルランド。

魔術犯罪集団である天の智慧研究会において、第二団^{アデプタス・オーダー}【地位】として活動する外道魔術師、シュバルゴ・モータナスはその日、どうしても外せない私用で最も警備が厳しい帝都へやって来ていた。

「……何故、オレがわざわざ出向いてまで貴様に会いに来なきやなんのだ。警備を躲すのも簡単では無いんだぞ」

「まあまあ、そう言わないでくださいって師匠。この埋め合わせは後でちゃんとするっすから」

「そうでなければ俺はここにはいない。要件を早く言え、特務分室が嗅ぎつけて来たらどうする」

警備は完璧に躲したが、それでも今いるのは帝都だ。

帝国宮廷魔導師団の本部は当然ここにあり、定期的に魔術による見廻りも行われている。外道魔術師としての悪名が知れ渡っている以上、長居は危険だ。

「分かってますって。……少し、王室が騒がしいんすよ。詳細が分からないから困ってんすよね」

「王室だど？」

王室。

つまり、女王とその家族、そして大臣に王室親衛隊。

関係者としてはこの辺りだろうが、このタイミングでの騒ぎは確かに不可解ではある。

シユバルゴが所属する天の智慧研究会が何かしらの作戦を執行したという話は少なくとも自身の耳には届いてはいないし、上司である第三^{ヘヴンス・オーダー}団「天位」からも音沙汰は無い。

その他のテロリストやらが関係している場合でも、何かしらの情報は表に出ているはずで、それを弟子である彼が逃すはずもない。

性格についてはあまり好まないが、情報収集の手腕はむしろシユバルゴよりも上である事を認めているのだ。

そんな彼が「詳細が分からない」と言ったとなれば、疑問も浮かぶ。

「貴様が匙を投げるとは、珍しいな。要件はその調査か？」

「流石師匠、話が早い。俺のコネクションで王城に忍び込めるのは師匠しかいないすから。達成したら埋め合わせにプラスしてさらにサービスするんで！」

「……その言葉、忘れるなよ」

相変わらず言葉が軽い弟子に念押しをして、行動を起こす準備をしに足を進めようとして——背にかけられる弟子の言葉で足を止める。

「ほんと、意外つすよね、師匠。外道魔術師で所属するのはあの天の智慧研究会なのに、世帯を持ちたがってるだなんて」

「……おい、貴様。それはオレを馬鹿にしていると解釈していいのか？大体、結婚願望の何が悪い!!外道魔術師は結婚してはいけないのか!」

「いや、世間的から見れば外道魔術師に嫁ぐ人なんていないっしょ。結婚したいならならんで師匠は外道魔術師になったんすか……」

正論で返されて言葉が続かない。

師匠と弟子のマウントがいつの間にかひっくり返っている。

まあ、他人の意見などどうでもいいのだが。

そんなことよりもシユバルゴにとって重要なのは、調査を終えた後の弟子がセツティングしてくれる合コンである。

チャライ口調の弟子は口調だけでなく外見も性格もチャライ。

その手のことはお手の物なのである。

「疑問に思うのは二の次にして、貴様はオレのために首尾を整えておけばいいんだ!!」

さっさと行け！」

「今回も失敗して終わることにならないければいいっすね！」

「貴様ア！」

シユバルゴモータナス29歳、彼女いない歴〓年齢の童貞である——。

#

様々な気配を遮断する魔術を重ね、念には念を入れて魔術的付与を自身に更に重ねたシユバルゴは、王城内に侵入していた。

（——確かに妙だな）

それは、言われなければ気付かない程に些細な違い。

以前に侵入した事があるシユバルゴですら、注視しなければ違いが分からないくらい、王城内の主要人物達は気取られまいと警戒をしつつ、その警戒心をも表に出さない徹底ぶり。

弟子はよく気づいたものだと感じする。

「——るなんて……」

複数の足音と共に話し込む声が聞こえて、咄嗟に天井に張り付いて聞き耳を立てる。

声の主は2人の女中のようだ。

「まだ、年若かったのに……ままならないですよね……」

「エルミアナ王女殿下が、流行り病でお亡くなりになるなんて……」
(なん……だと……?)

エルミアナ^{II}イエル^{II}ケル^{II}アルザーノ。

アルザーノ帝国における第二王女であり、天の智慧研究会にとって重要な人物であるとシユバルゴが考察する人物。

というのも、何かとシユバルゴの上司である第三^{ヘヴンズ・オーダー}団「天位」の一人が気に入っており、定期的の様子を報告するように命令されているのだ。

以前来たことがあるのはこれが原因だったりする。

警備が厳重で姿は見えていないが、ある程度近づいて魔術を用いて聞き耳を立てて様子を伺ったりしていた。

そんな人物が、流行り病で死んだ？

有り得ない、と言える。

そもそもこれだけの警戒態勢を築いている中で、口が軽い女中が知っている事が事実とは到底思えなかった。

というか、王女誕生からしばらくして表に姿を晒さなくなつたのは何故なのかを考えると、何かがあると思えない。

であれば、向かうべきなのは。

(女王は今、どこにいるのか……)

真相を突き止めるべく、シユバルゴは女王陛下を監視する為に動こうとして。

探知魔術に自身が引っかけたことを知らせる魔術が反応した。

(ツ、バレたか!?)

どれだけ警戒して隠蔽を重ねても、王城はトップクラスの魔術師や魔道士が常駐している為に、本気で探知魔術を使われては自身の存在が露呈することは避けられない。

だからこそ何かしらの魔術にかかってしまった時にそれを一回のみ知らせる魔術――

――固有魔術オリジナル、【魔術知覚】(そのまんま)を使用していたのだが、それが役に立ったらしい。

この魔術のデメリットとして、自分で自身に魔術付与をした場合でも反応してしまう為に、魔術付与をし終えてから使用しないと意味が無くなってしまうことから、使い所は限られるのだが。

「チツ、居場所が割れてしまったのならなりふり構っていられないな……!」

索敵の魔術を使用し、通路の全てが塞がれたことを確認したシユバルゴは、【ブレイズ・バースト】で城壁を爆破し、【グラヴィティ・コントロール】で自身の重力を軽くし、飛び降りる。

このまま帝都を出てしまいたい、そうは問屋が卸さないらしい。

「……貴方は、外道魔術師シユバルゴモータナスね。天の智慧研究会、第二団【地位】が、王城になんの用だったのかしら？」

「フン、答えると思うか？特務分室、【魔術師】のイヴイグナイト」
考えうる限りでの最悪の展開だ。

ここでイヴと戦闘した時の勝算は無いに等しい。

それでも、ここで捕まり、死ぬわけにもいかない。

何故ならば、

まだ、結婚していないからだ!!

幸せな生活に飢えているシユバルゴは、こんなところで時間を取られる訳には行かないのだ。

……こうなってくると、本当に何故外道魔術師になり天の智慧研究会に所属しているのか、自身でも疑問に思えてくるが……。

「なあってしまったものは仕方ない」

「はあ？」

「気にするな、こちらの話だ」

とはいえ、ここからどうするか。

そもそも、見つかってから城外へと飛び出し、着地した先には【魔術師】が居た、と

いうのはあまりにも出来すぎている。

探知魔術に引っかけたからへの対応であれば確実に「魔術師」はここにはいない。かといって所属する天の智慧研究会や、不肖の弟子が情報を流したとも考えづらい。であれば、この場には「何か」があると考えるべきだろう。

イヴの行動を警戒しつつ、辺りを視線だけで見渡す。

何も見つけられなければ、シュバルゴの人生は終わりだ。

抵抗しても死ぬし、投降しても口封じの為に殺されるだろう。

だが——天はシュバルゴに味方した。

「貴様らの背後の……馬車、か？何かがあるな？」

「……ッ!!」

あからさまな反応。

苦虫を噛み潰したような貌をするイヴに、シュバルゴは何かしらの重要物が存在することを確信した。

普段であれば、イヴはこのような反応を見せるようなミスはしないはずだが、今回に限っては重要度が特別上なのだろう。

「重要なものがあるにしては、それを守るのが【魔術師】一人とはな」

「ふん、貴方一人くらい、《私・一人で・十分よ》!!」

「ツ!!」

黒魔【ブレイズ・バースト】がシュバルゴを襲うが、着弾するまでの刹那の間に詠唱済みしてあつた「フォース・シールド」を時間差起動してやり過ごす。

煙が晴れるまでの時間を使ってイヴに接近し、その頃には動き出していた馬車の影を一瞥する。

それを襲う人物らしき影も一緒に。

煙が晴れると同時にイヴの位置を把握した瞬間に「ライトニング・ピアス」を時間差起動。

これで詠唱済みの魔術は使い切つたが、イヴは上手く避けられなく、かすり傷だ。

それでも馬車を再び盗み見るだけの時間は稼げた。

馬車を襲つた人物を確認すると、案の定弟子だつた。

「吠えよ炎獅子!!」

「光の障壁よ」

この場に眷属秘呪【第七園】は設置されていないらしい。

まあ、秘匿護衛任務だつたとしても、出発地である王城で襲われるとは思わなかつたのだらう。

そもそも【第七園】の構築にはかなりの数の工程が必要になる。

通り過ぎるだけの予定だった城門に設置している筈もなかった。

そして、馬車が近い為にB級以上の軍用魔術は使えない。

【第七園】が無いイヴには、C級以下の魔術で足止めをする事が精一杯だろう。

弟子ではない男の声を聞いて、シュバルゴは弟子の様子を確認する。

「……ほう、馬車の方にも手練が居たか」

「ツ!!ええ、私は貴方一人を止められればそれでいいのよ」

銀髪の紳士の放つ風魔術が、弟子の身体を吹き飛ばす。

事前に防護魔術を重ねがけしていたらしい弟子が、大事無いようであることを確認し、再びイヴを見る。

「――の戦槍よ!!」

「ち。まずい、な……ツ!!」

【ライトニング・ピアス】を放たれ、その場を横に跳躍して回避するが、ダブル・キャスト二反響唱によってもう一筋の雷閃が、着地直後のシュバルゴの身体を貫く。

着地と同時に身体をひねったことや、未だ付与魔術が解けていなかったのが幸いして致命傷には至らなかったが、このままでは数手で詰みだ。

【魔術師】イヴ!!イグナイトがこの好機を逃すはずもないため、全力で逃走したくなるが、チエックメイトもあと数手。

諦めるにはまだ早い。

「《雷槍よ》——《踊れ》^{ダンス}」

「っ!?!【七星剣】!?!」

【ライトニング・ピアス】の同時七連射が、イヴ目掛けて飛んでいく。

一点に収束していくために、「フォース・シールド」や、魔術的付与を重ねた防具をも貫く威力をもつ超絶技巧——だが、雷閃が貫いたハズのイヴの姿が霞へと消える。

そして、背後から首に当てられる暗器。

「……幻術か」

「ご名答。秘伝【火幻術】。火の揺らめきで相手に幻術をかける——秘伝の奥の手よ。観念しなさい、シュバルゴ||モータナス」

「それを言えるのは、本当に貴様なのか？」

「何を言つて——」

シュバルゴの視線の先。

弟子一人で確保しようとしていた、唯一の逃げ道。

銀髪の紳士は地面に膝をつき、弟子は見事に馬車の中身を確保した。

「ッ!?!まさか、今の【ライトニング・ピアス】は——!?!」

「気付いたか」

先程放った【七星剣】は、ただイヴを狙ったものではなかった。

そもそも【七星剣】でイヴを撃破できるなんてシュバルゴは思っていない。

シュバルゴが狙ったのは、イヴの先に居る銀髪の紳士。

イヴの幻術はイヴ自身の姿をシュバルゴに誤認させただけであり、それだけで完結していたために、延長線上にいた紳士を狙った【七星剣】は何にも阻まれることなく直撃した。

何かしらの対応をしたのか致命傷を避けているあたり、彼もまた実力者であることが分かるが、もう満足には動けないだろう。

「さあ、どうする【魔術師】？」

「くっ——」

イヴの脳裏によぎる一瞬の迷い。

それが、隙を生んだ。

肘打ちにてイヴの鳩尾を殴打し、緩んだ腕を掴んで背負い投げ。

形成が逆転し、だがここで油断せずに【スリープ・サウンド】で眠らせ、【スペル・シール】で無力化する。

人質とするために武装解除をしたイヴを背負って馬車に近づいたシュバルゴは、状況を確認する。

「……誰かと思えば、貴様だったか、レナード・フィーベル」

「天の智慧、研究会……！どうやって、情報を!!」

「偶然に過ぎん。今回の件は、オレも運が悪かったと言える。……そのお陰でこの状況になった訳だが」

【魔術師】やレナードとの戦闘に巻き込まれないよう離れた場所に居た騎士や魔術師達は、人質に取られた二人と馬車の存在から近づくことが出来ない。

シュバルゴは馬車の中身を知る為に弟子が確保したものを確認しようと中に入る。

「ひっ」

「あ、師匠、お疲れです。気になる馬車の中身は王女様だったつすよ」

流れるような金糸のような髪、空色の瞳、そして恐怖からくる涙。

未だ幼いと言えるあどけなさはさることながら、シュバルゴが侵入した時の恐れる声も可愛い。(語彙力低下)

まさに生死を調査しようとしていた第二王女が、そこにいた。

「……エルミアナ王女、か」

「え、師匠？なんか見たことも無い表情してるんすけど。まさか、王女様に一目惚れしたとか？いや、そんな訳な——」

「どうやら、オレは………ロリコンだったらしい」

「師匠？え、マジで言ってるんすか!？」

シュバルゴ||モータナス29歳、幼女に一目惚れしたらしい——。

第二話

「……………ねえ、師匠？」

馬車の御者をやらせた弟子が、シュバルゴにジト目を向けながら声をかける。

人質として一緒に連れてきたイヴとレナード、病死と偽って密かに帝都を出ようとしていたエルミアナ王女。

この三人にシュバルゴとその弟子を含めた五人が、馬車に乗って既に帝都を出てなお馬を走らせている。

「よかつたんつか、これで」

「……………仕方あるまい。これから狙われる事になるだろうが、オレは後悔も反省もしていないからな」

「いや、俺的には一言言つて欲しかつたんすけど!? 一生師匠に着いていくとは言つたすけど、命狙われる事になるだなんて思つてなかつた!!」

命を狙われる。

それもそのハズ、エルミアナ王女を確保した事をどうやって知ったのかは不明だが、シュバルゴの上司……………ヘヴンス・オーダー第三団【天位】の一人がエルミアナ王女の身柄を引き渡せ、という

命令に対して「断る！」と啖呵を切ったためだ。

その結果一緒に追われることになった弟子……ホークセルヴァリアには申し訳ないとは思いますが、天の智慧研究会の方針に背いたこと自体に関して後悔は少しも感じていなかった。

むしろあまりの憤慨から、目覚めたイヴやレナード、王女の前で研究会に所属することを意味するタトウを魔術で焼き消したほどだった。

「おい、私たちはどうすればいいんだ？」

「知らないわよ、そんなの。戻った所で、私は、もう……」

目の前で天の智慧研究会を裏切るのを見せつけられたレナードは困惑し、イヴは何故かこの世の終わりのような表情をしている。

「それで、宛はあるか、ホーク」

「久々に師匠の口から俺の名前呼んでくれたっすね……。まあ、無いことも無いっすけど、このまま行くのは不味いっすね」

「……追跡だな？」

研究会子飼いの暗殺者が、追ってきている。

突然の事で数を用意出来なかったのか一人のみだが、このまま何もなかったら場所を特定されて援軍が来るだろう。

そうなつたら今度こそ詰みだ。

「済まなかつたな、エルミアナ王女。オレが引つ掻き回したせいで帝都脱出が露呈した」
「い、いえ……」

「流行り病で亡くなつたなんて苦しい理由だったから、いつか絶対にバレるとは思つていたが、そもそもまだ亡くなつたつて情報自体外に出てなかつた筈なんだが……」

レナードが挟む疑問は最もだが、こればかりは弟子の優秀さを自慢することぐらいしか出来ない。

なんかおかしい、というだけで調査を依頼してきて、それが見事に当たつていた事はシユバルゴも脱帽である。

「ホーク、後で合流する。使い魔を残していくから先に行け」

「分かつたつす」

「……レナード、フィーベル、王女を任せたぞ」

「それは任されたが、私はまだお前を信用してないからな？」

「別にいい。貴様がオレを信用していなかろうが、今とれる手はホークに着いていくことだけだ。それとも、研究会の息がかかつておらず、絶対に身を隠せると言いきれぬ場所の宛が、貴様にあるのか？」

今回の帝都脱出は、敵対組織に知られていないことを前提にしたものだ。

ここにレナードが居ることから、何かしらの問題からエルミアナ王女はフィーベル家にお世話になる予定だったのだろうが、研究会に割れてしまった以上その計画は頓挫してしまった。

宛がない現状では、ホークに着いていく事がベストなのだ。

「……分かった」

「……ふん。ホーク、一度停めろ」

一度馬車を停止させ、ちょうど見つけたネズミを使い魔にして、シュバルゴは襲撃者の方を見すえる。

「ではな」

その声を合図にして、シュバルゴと馬車はそれぞれ逆方向に動き出す。

魔術を詠唱ストックしながら、整備された街道を進む。

索敵魔術に引っかけかけた暗殺者とは、直ぐに邂逅した。

「……仕留める」

「やれるものなら」

一瞬の会話、振り下ろされる暗殺者の剣。

詠唱済みしておいた「ウエポン・エンチャント」を両手に対して時間差起動ディレイスタートし、力任せに弾く。

かち上げられた剣は暗殺者の手を離れ、少し離れた地面に突き刺さる。

そんなもの関係ないと、地面に手を着いたかと思えば、次の瞬間には暗殺者の手に一本の剣が頭れていて、今度は横薙ぎに迫る斬撃を両手で受け、流す。

「ハイドロウ・クロー隠す爪」か。また面倒な」

シユバルゴの考察に反応することも無く、卓越した剣術でシユバルゴを追い詰めていく暗殺者。

対するシユバルゴは暗殺者の剣筋を見切り、最低限の動きで避けるのを繰り返している。

「《爆》」

最短の詠唱で発動する「クイック・イグニッション」の小規模の爆発が暗殺者の視界を遮る。

殺傷力は低いが目眩しとしては使える程度の爆炎を利用して、暗殺者の視界の死角に詠唱済みの「サイレンス・サイン」——気配遮断の魔術を起動して移動する。

「これを使うことになるとはな。オレもまだまだだ」

腰に佩いていたレイピアを抜き放ち、暗殺者の死角から襲いかかる。

かろうじて反応した暗殺者だったが、再び剣が弾き飛ばされて丸腰になる。

「チッ……!!」

「さて、どうする?」「隠す爪」はそう何度も成功する代物ではない。イルシア・レイフオードでは無い貴様では、ここから挽回する策は無い。……違うか?」

「……違わない。……が、《それがどうした》!!」

暗殺者は再び地面に手を当て、土をウーツ鋼の剣へと変化させる。

「ほう……!成功させるか!!」

「死ぬ、裏切り者!!」

錬成からそのまま剣を斬りあげる暗殺者の攻撃を、受けたら業物であるため折れはせずとも、確実に傷が付くだろうことを気にしてレイピアでは受けず、未だ解除されていない「ウエボン・エンチャント」が付与されている腕で防ぐシユバルゴだが、斬られはせずとも上空へと打ち飛ばされる。

「見事、だが——オレの、勝ちだ!!」

剣を振り上げ、隙だらけとなった暗殺者に向け、最後の詠唱済み呪文である「ライトニング・ピアス」を起動し、雷閃が暗殺者の脳天を貫いた。

#

暗殺者の対処を終えたシユバルゴは、更なる追跡者が現れる前に馬車の跡の処理をしながら天の智慧研究会の追っ手から行方を眩ませつつ、預けた使い魔の反応を頼りにホーク達の下へと辿り着いた。

「……おい、ホーク。貴様の言う宛がココだと言うのは……本気なのか？」

「いや、師匠なら、帝国内で一番安全なのが何処なのか……ある程度推測できてたはずですよね？ココ以上に安全な場所なんて思い付かないっすよ、俺」

帝都オルランドから馬車で四日、早馬だと二日程度の場所にある、比較的大きな都市、フエジテ。

そこに存在する最強の魔術師、セリカⅡアルフォネアの邸宅の前に、シユバルゴ達は居た。

「……レナード、貴様が事情を説明しろ」

「はあっ？なんで私が!!」

「犯罪者として名が通っているオレよりも、魔導省の官僚である貴様の方が信用出来るのは自明の理だと思うが？そも、オレ達は王女が隠遁する理由を知らん。【魔術師】は――

――あのザマだしな」

特務分室最強の【魔術師】である筈のイヴは、膝を抱えてブツブツとうわ言を呟いている。

心做しか、目に光が宿っていないように見える。

「……ああ、分かった。だが、お前も手伝えよ。天の智慧研究会を裏切った以上、お前らもここに厄介になるんだろう？それに関しては私には説明出来んからな」

「……ふん、分かっている」

シュバルゴとレナードが説明責任を押し付け合うのを終えて、アルフォネア邸に目を向ける。

すると――

「なあお前ら、ウチの前で何を騒いでんだよ?」

セリカⅡアルフォネアその人が、面倒くさそうにしながら二人を覗いていた。

「ッ!?!」

「うおっ!?!」

反射的に飛び下がって戦闘態勢に移行してしまうシュバルゴとレナード。

そんな二人と顔を伏せているイヴ、そして馬車から様子を伺っているエルミアナ王女を順に見たセリカが口を開いた。

「……取り敢えず、入っていいぞ」

拒絶されなかったことに安堵しつつ、アルフォネア邸内にお邪魔することとなった。

第三話

「あっはっはっは!!」

アルフォネア邸内に、女性の笑い声が響き渡る。

館の主、セリカの声だ。

「アリスの娘に、くくっ、一目惚れして、天の智慧研究会を、ぷくくっ、裏切った!?! あっはっはっは! ひい、お腹痛いっ!!」

セリカが爆笑する原因となった話をしたシュバルゴは苦い顔をし、その想い人であるエルミアナは困惑している。

まあ、犯罪者から一目惚れされたと言われてもこのような反応しか出来ないのは無理も無いが。

「はっはっは、ゴホツゴホツ……ふいー、笑った笑った。久しぶりにこんなに笑ったわ」
「……それで、匿ってくれるのか?」

「ああ、アリスの娘に関しては私も気にしてたしな。もちろんお前ら二人もここに居ていいぞ。なんか面白そうだし」

「それはそれでどうかしてると思うっすよ……?」

こういう訳で、アルフォネア邸で居候することとなったシュバルゴとホーク、そしてエルミアナ王女。

エルミアナ王女は名前をルミアアテインジェルに変えて暮らしていくことになった。

——そして。

「……………いつまで、そうしているつもりだ、【魔術師】？」

「……………」

一向に動く気配のないイヴを見兼ねて、シュバルゴが声をかける。

その疑問に答えるどころか、ピクリとも反応すらない様子を見て、苛立ちを隠せなくなる。

そんなシュバルゴに待ったをかけたのは、意外にもレナードだった。

「あー、イグナイト家はあんまり良い噂を聞かない。色々と家族間での込み入った事情があるんだろう。そっとしておいた方がいいと思うが」

「だが、いつまでも伏せつているままではどうにもならん。仮にもひとつの組織のトップに座している貴様が、私情で機能しなくなるのはどうかと思うがな」

シュバルゴが煽るような言葉を浴びせても、なんの反応も無い。

舌打ちの後に出来るだけイヴを視界に入れないようにすることを決め、今後の身の振り方や方針を決めるため、ホークを連れてセリカの下へと向かった。

「それで、オレとホークは、ここに居候させてくれる代わりに何をすればいい?」
「うーん? 何かするの?」

「……なんの対価もなく安全を手に入れられるとは思っていない。ルミアの安全を確保できるのならば、オレに出来る範囲で何でもやるが」

「ちよ、師匠!? そんな、何でもなんて言って良かったんすか!」

「問題ない。貴様は口を挟むな、ホーク」

「いや、だったら俺も巻き込まないでくださいつすよ!? 俺は何でもなんて言ってますからね!!」

弟子からの抗議を鼻で笑って誤魔化し、改めてセリカを見据える。

ここでどんな頼み事を言われようとも、全力で取り組むつもりでいた。

対するセリカは「何でも」という言葉ににんまりと笑みを浮かべて、しばらく考えた後に言った。

「じゃあ、お前……今日から私の小間使いな」

「承知した」

「ええええええええええええええええ!!」

「あつはつはつは!」

あの傲岸不遜の師匠が、小間使いに……というホークの呟きを聞き流しながら、シユ

バルゴは外道魔術師から、即諾したことに対して爆笑しているセリカの小間使いに転職することが決まったのだった。

ちなみにホークは実際に天の智慧研究会の一員ではなく、研究会とはシュバルゴとしか関わりが無いことから表に出て問題ないとされ、セリカの仕事先であるアルザーノ帝国魔術学院の講師として働くこととなったのは余談だ。

#

帝国宮廷魔導師団特務分室室長、【魔術師】のイヴⅡイグナイトは、シュバルゴとホークが立ち去り、レナードが魔導省に戻った後、しばらくして立ち上がった。

人生が終わったかのように、幽鬼の如くフラフラと歩みを進めて向かった先は、玄関口。

「……【魔術師】、ようやく——貴様、本当に何をしている？」

セリカの小間使いとして早速邸内の清掃をしていたシュバルゴは、イヴの姿を見て困惑していた。

対するイヴは、シュバルゴを睨みつける。

「貴方達の襲撃のせいで、私にはもう何も無い。戻った所で、【魔術師】の称号は剥奪されて、イグナイトからも追放されて路頭に迷うことになるのがオチよ」

「……ただ一度の失敗でか？」

「ただ一度の失敗でも、失敗は失敗。それに、失敗の仕方もある。真つ向から戦つて敗北した私に【魔術師】を……イグナイトを名乗らせてくれるほど父上は優しくない」

「……あの戦闘はオレの勝利条件が馬車の確保だったのだから真つ向ではなかっただろう。本当に貴様と一对一だったなら、オレが負けていた」

「予想外のことに迷つてその隙を突かれた時点で同じことよ」

思わず苦虫を噛み潰したような表情になるシユバルゴ。

【魔術師】イヴⅡイグナイトの真骨頂は作戦の立案と人物の采配だと、シユバルゴは聞いていた。

代々【魔術師】はイグナイト家が収まり、最高の戦果を上げていたとはいえ、一度負けた程度で指揮官として優秀であるイヴを勘当するなど正気の沙汰では無い。

そんな奴がいるならば、その人物はただの”愚者”だろうに。

だが、イヴの差し迫った表情を見るに、彼女の父親はその”愚者”に当てはまるらしい。

過去に【魔術師】だったイグナイト家の現当主で、アルザーノ帝国女王の側近であるアゼルⅡイグナイトがそんな人物だとは、敵対者だったシユバルゴとしてはあまり信じられないが、事実なのだろう。

だが――

「だから、何だ？ 貴様は同情して欲しいのか？ 慰めて欲しいのか？ ……一緒に怒って欲しいのか？ それをオレに話した所でどうにもならん。気の利いた事など言えんし、現状では出来ることなど何も無い」

「……っ、ええ、そうね。別に、話した事に意味なんてないわよ。貴方は、そこをどいてくれればいい」

言いたい事を言うだけ言ったイヴは、シュバルゴから目を外してその脇を通り抜ける。

アルフォネア邸の玄関口から出ようとしているイヴに、目を細めたシュバルゴは声をかけた。

「——オレは何も出来んが、貴様には仲間がいるのだろう？ 親を頼れないならば、仲間頼る他あるまい。……貴様の現状と一緒に怒ってくれる仲間に」

「仲間がまだ【魔術師】じゃなくなった私の傍にいてくれるのなら、そんな選択肢もあったかもね？」

自身を嘲るようなイヴのつぶやきに、シュバルゴは何も言えない。

そこからはアルフォネア邸を出ていくイヴを止める声は無かった。

「……………フン」

ただ、面白くないと言わんばかりの鼻を鳴らす音が、後に響いた。

第四話

「シュバルゴ！掃除終わったら買い出し行ってこい！」

「承知した」

「シュバルゴ！私とホークの弁当は！」

「出来ている」

「シュバルゴ！ちよつと付き合え!!」

「いくらでも」

——セリカの小間使いになって数日。

事ある毎に名を呼ぶ主人の命令に対応すべく、シュバルゴは邸内を奔走する日々を送っていた。

そんなある日、気になって弟子に講師の合間を縫って調べさせていたことについて、進捗があつたと報告が上がった。

「それで、イヴⅡイグナイトはどうなつた？」

シュバルゴの懸念はイヴの処遇だった。

本来なら他人、それも敵だった彼女など気にすることなど無いはずのシュバルゴが、

それでもホークに調べさせたのは、共に行動をして知った彼女の状況を哀れんだから、という訳ではない。

もちろん、全く無かったかと言われればそれは嘘になるが、それが全てではなかった。シユバルゴは、自分の過去をイヴと重ねていた。

シユバルゴの手によって滅ぼされたが、モータナス家は代々王室親衛隊に所属するエリート騎士として王家に仕えてきた家系だった。

目指す目標はゼーロスのような超一級の剣技を扱う騎士であり、魔術に関してはそれなりに扱う事が出来ればそれで良しとした家系。

事実、モータナスの姓を持つ騎士はゼーロス程ではないにしろ、他と比べると圧倒的に強い猛者ばかりだった。

だが、シユバルゴは魔術の才能はあれど、剣技の才能は平凡そのものだった。

どれだけ努力しようと、後から産まれてきた弟や、女である妹にまで、少しの鍛錬で実力を抜かれていった。

明確に家内で差別を受け始めたのは、一般兵士との決闘で大敗北を喫した時からだろうか。

モータナス家最弱のシユバルゴが、警邏兵の一人と一对一の決闘を行い、完膚なきまでに叩きのめされた一件。

弟達には劣るも、努力をし続けてそれなりに剣を扱えるようになって、少しばかりの自信を持ち始めた——そんな時に父親から言い渡された兵士との決闘。

一方的に攻められて防戦一方だったシュバルゴに、最後まで勝利の女神が垣間見えることも無く。

大敗を喫したシュバルゴに、家族はもはや言葉を交わすことも無くなった。

——ああ、そうだった。

強い結婚願望からか忘れていた外道魔術師となつたきつかけを、シュバルゴはイヴの様相を見て思い出したのだ。

だから、家族に蔑ろにされているイヴに対して他人のような気がしなかった。

放つてはおけないと、そう思つたのだ。

「どうやら、本当に《魔術師》の任を解かれそうになつたらしいつす」

「解かれそうに、という事は、実際には？」

「はい、お察しの通り、解任にまでは至らなかつたようつすね。特務分室の連中が女王様にまで直談判して事なきを得たみたいつすよ」

そんな弟子の報告聞いたシュバルゴはフンと鼻を鳴らし、ソファに座り込む。

「やはり、居るのではないか。俺とは違って、頼れる仲間が」

シュバルゴが外道に堕ちることを決めた時、彼女のように自分の事で怒ってくれるよ

うな頼れる仲間がいたのなら……一体今、どうしていたのだろうか。

考えても詮無きことだが、イヴが仲間の尽力で家族の脅威を乗り切った今、考えずには居られなかった。

#

「……で、だ。わざわざこんな時間になって話すことって何だ、シュバルゴ?」

明くる日の夜、シュバルゴは学院から帰ってきた主……セリカと話をすべく、用意した夕食を持ってセリカの部屋へとやって来ていた。

「天の智慧研究会の情報を共有しておこうと思つてな。俺の権限で得た情報なぞたかが知れているが、それでも公になれば不味いことのオンパレードになるが、聞く気はあるか?」

「そうだな、んむ……まあ、聞いておく。あ、んぐんぐ、アリスの娘……いや、ルミアを狙う理由とかは知りたいしな」

食べながら答えたセリカに、シュバルゴは口を一度つむぐ。

研究会の情報を漏らすということは、一時の迷いという言い訳が出来ない程の明確な裏切り行為だ。

話せばもう、後戻りは出来なくなる。

——セリカが帰ってくる前、起きた出来事を思い出す。

帰るのが遅くなるセリカのものとは別に、早く帰ってきたホークや一日中邸内に居るルミアの為に夕食を作ったり、風呂の湯を沸かしたりと、一通りの家事を終えてから作った料理を食べようと食堂へ向かうと、ルミアとホークが席に着いてシュバルゴを待っていた。

「先に食べていても良かったものを」

「いや、ルミアちゃんが心細そうにしてたから、俺が師匠を待つと一緒に食べようって提案したんつすよ！」

言われてみれば、初めて会った時からルミアが笑ったところなど見たことがなかった。

それもそのはず、出会い方からして恐怖を覚えた相手二人と、母親に連れられて数回会った程度のセリカと一緒に暮らしているのだ。

歳の近い子も居ないこの場所に対して、不安にならないはずが無かった。

「……それは盲点だったな。オレとした事が、好きな相手の気持ちを汲んでやることも出来んとは……」

「いや、何言ってるんすか師匠。正直キモイツす」

「ホーク貴様ア！」

弟子にキモイ呼ばわりされたシュバルゴがキレて掴みかかる。

抵抗するホークだが、近接での勝負では勝てる訳もなく、ほぼされるがままになって
いる。

「痛い！痛いっすよ師匠!!」

「フン、当たり前だろう、痛くしているのだから。……というか貴様、一度痛い目にあつた方がいいぞ。事ある毎にオレに恋愛の自慢話を聞かせよってからに!!」

「それ今言うっすか!?!っていうか良い機会だし俺も言わせてもらおうっすけどね、その偉そうな物言いやめた方がいいっすよ!せつかくセツティングした合コンも全部その威圧感で台無しにしてるのわかってるんすか!?!」

「これは癖みたいなものだ。そも、そのような瑣末事で離れていく女なぞこちらから願
い下げだ!!」

「師匠は理想が高すぎるんっすよ!自分の方も妥協して癖を治すとかしないから三十路
近くなっても売れ残ってるんっすよ、分かってんすか恋愛弱者!!」

「なんだと三股野郎!!」

「ここに來てからもう会えてないっすよバカ師匠!!」

もはや罵詈雑言の嵐で、何を言っているのかも自分で分かっていない中、二人の息が
続かず口喧嘩が途切れた、その時——

「っ、ふふ、あはは……」

可愛らしい笑い声が、二人の耳に入ってきた。

思わず声の主……ルミアを見てしまう二人。

そんな二人を見て、ようやく笑ってしまったことに気づいたルミアが頬を赤くして顔を両手で覆う。

「――、」

「え、師匠？ 師匠!? 白目剥いてるっすよ!？」

「―― 天使か……」

「師匠!! ちよ、本気で逝くつもりっすか!？」

ルミアのあまりの可愛さに、本気で昇天しそうになるシュバルゴをどうにか留まらせるホーク。

結局夕食を食べたのはそれから数十分後になり、冷めた料理を食べる羽目になった。

それでもルミアの表情は幾分か良くなり、久方振りに他人と一緒に食べる料理は、どことなく美味しかった。

―― そんな、天使のような笑顔を護りたい。

29歳になって初めて、誰かを守りたいという思いを手にしたシュバルゴは、研究会に対する未練などありはしないことを再確認し、目の前のセリカに向けて口を開いた。

「オレが話せるのは、直属の上司だった第三団（ヘッスンズ・オーダー）「天位」の一人の名、今後の計画の最重要

の通過点、そして……エルミアナ王女の持つ異能についての三つだ」

「異能か……ルミアが王家を追放された原因だったか？」

「ああ、と言っても、オレが知るのには彼女のソレがレナード達が聞かされていた”感応増幅者”では無いナニカだということぐらいだがな」

「なに？」

感応増幅者、というだけだったならルミアが研究会に狙われることは無かつただろう。

他にも存在する異能であるというのに、王族を狙うのはリスクが高すぎる。

だが、肝心のルミアの異能の正体はシュバルグにも上司に聞かされていないため分からない。

【天の智慧研究会】にとってルミアの異能……というよりは、ルミア自身が重要であるように思える。 确实ではないがな」

「そうか……」

「次に、オレの上司についてだが……主、あるじ 貴様ともおそらく知己だろう」

「私の知己？ 学院にでも潜んでるのか？」

「いや……」

一拍を置いて、その名を出す。

「二百年前、主と共に『魔導大戦』で活躍した『六英雄』の一人——【鋼の聖騎士】ラザールⅡアステールだ」

第五話

「——バカな」

ラザールの名を聞いたセリカが、料理を食べる手を止めて目を見開く。

死んだはずの仲間が、共に戦った英雄が——生きて、外道に堕ちている。

到底信じられない、有り得ない事だが……セリカはシュバルゴが妄言を吐くとも思えなかった。

「それが本当なら、対応できるのは私ぐらいか……」

『六英雄』と呼ばれた者たちは、文字通り人間じゃない強さを誇る。

中でも【剣の姫】エリエーテはさらに別格の強さを誇るが……とにかく、ラザールが悪事に手を染めているという事実を知った今、嘗ての戦友と戦う準備ぐらいは整えておかなければならないだろう。

実の、では無いが息子が……グレンが帝国軍で働いているのだ。

大切な存在を喪わないために、護るための準備は不可欠だ。

「ツチ、次の地下探索は中止だな……。あのガキ、面倒事を増やしやがつて……！」

「地下探索？」

「ん？ああ、魔術学院の地下遺跡の探索だよ。危険が少ない最上層は授業で使ったりしてるが、それより下は危険度が跳ね上がる。私でも、攻略は半分も進んでない」

「……名だたる【第七階梯】である主が攻略不可能となると、余程化け物地味な構造をしているのだな？……、まあいい。それで話は戻るが、研究会が狙っている計画の重要な通過点の話だ」

まだ、これ以上の衝撃的な話があるのか、とげんなりしているセリカを尻目に、シユバルゴは告げる。

「研究会が躍起になって実現させようとしている最重要の研究……死者をよみがえらせる禁忌、project revive lifeだ」
グレン
息子がいつの日か話していた、救えなかった兄妹の話。

セリカが聞いたのは、死者をよみがえらせる【固有魔術】といっても過言ではない儀式魔術研究プロジェクト、Reell計画を主導していた一人の男が、妹と親友とともに天の智慧研究会から逃げ出そうとして、親友の男に裏切られて妹ともども殺されたということだけだったが、グレンが何かを隠していることには気づいていた。

「Reell計画がどこで研究されているのかは分らんが、俺が知る中でそれらを研究している組織の一つとしては、『蒼天十字団』が挙げられる」

「『蒼天十字団』だと……!？」

アルザーノ帝国内部に秘密裏に存在する、天の智慧研究会にも関わっていて後ろ暗い研究を行っているなどという眉唾物の都市伝説とされている組織。

それを明確に存在することを暴露したシュバルゴに、セリカが詰め寄る。

「アリシア女王がかの組織の存在を知っているか否かは……主もよく知っているだろう？」

「……知らないだろうな。アリスが知っていてそれを放置することはないだろうし」

シュバルゴの言葉に冷静さを取り戻したセリカは、椅子にどかりと座り込む。

自身を知る全てを話し終えたシュバルゴは食べ終えた皿を下げ、セリカは聞いた話を纏めるために自室へと向かった。

そして、それから数ヶ月経過して。

アルフォネア邸の使用人として働きながら絶賛片想い中の相手であるルミアを愛でる日々を送っていたシュバルゴと、アルザーノ帝国魔術学院の講師として働きながらアルフォネア邸に居候するホーク。

ルミアも親に捨てられた事実からかたまに影が差すこともあるが、少しずつ笑顔が増えてきており、その背景には時たまレナードが連れてくる一人娘の存在もあるのだろう。

セリカもまた、アルフォネア邸に結界を張ったり、ラザールと相對した時の為の策を

練ったりしながら、学院勤めをしている。

そんなアルフォニア邸に、ある人物が帰ってきた。

「セリカ、帰ったぞ〜!——つて、んな!? シュバルゴ―モータナス!」

「……【愚者】か、久しいな」

アルザーノ帝国における軍である帝国宮廷魔導師団の、魔術的な犯罪に対して派遣される『特務分室』、その執行官ナンバー0【愚者】——グレン―レーダスとの、敵として出会った時以来の再会だった。

こちらを睨みながら左手を向けてくるグレンに対して、シュバルゴは降参とばかりに両腕を上げる。

「なんでお前がここに!!」

「……イヴ―イグナイトに聞いていないのか?」

「イヴに? 何の話……つて、まさか、イヴの奴が敗北した相手つて」

「オレだな」

ますます睨みをきかせてくるグレンだが、スーツを着てモップを持つシュバルゴの姿を見て頭が冷える。

「……何してるんだ、ここで?」

「見てわかるのか? 掃除だ」

「いやいや、どういう事だよ!」

淡々と答えるシュバルゴに、脳内でハテナしか浮かばず困惑するグレン。そんな二人のもとに、自室から出てきたルミアが鉢合わせた。

表向きには病死したことになっていている王女だが、改名とともに髪を切り、セリカのセンスで購入された私服を着たルミアは、一先ず王女だとバレない程度にはなっていた。

「シュバルゴさん、お疲れ様です。ええと、そちらの人は……?」

「主……セリカも言っていただろう。彼女が散々自慢してきた息子だ」

「ちよつと待つて!!いろいろとツツコミどころ満載なんだけどツ?いつからこんなに居候増えてんの!」

外道魔術師のはずのシュバルゴを笑顔で労うルミアの姿を見て、遂にグレンの脳が限界を迎えた。

そんな痛くなってきた頭を抱えるグレンの背後、玄関の戸が再び開く。

「ただいまあー、つて、グレンじゃん。玄関で何やってんだ?」

「え、【愚者】が居るんっすか?そういえば、セリカさんの息子でしたっけ」

職務を終えたセリカとホークが帰ってきた。

銃を抜いて玄関でこちらに顔を向けて立ち尽くす息子の姿を見て、セリカは首を傾げ……グレンの身体の前方、左指の先で佇むシュバルゴの姿を認めて合点がいった。

「ああ、そのシユバルゴは私の小間使いになったから、警戒しなくても大丈夫だぞ？お前も遠慮せず使ってやれ」

「はあッ!？」

「……フン、主が言うならば仕方がない。オレに出来ることならば何でもやってやる。何なりと言え」

「マジで、一体どういう事なんだよ……?！」

グレンの拭えない混乱と困惑は、シユバルゴが用意した料理を食べながら事の経緯を説明し終えるまで続くこととなった。

#

「プツ、クク、だくはっはっは!!」

ルミアの正体だけは伏せて、シユバルゴ達が辿った行程を一から説明し終える頃には、先日のセリカと同様にグレンも大笑いしていた。

「狙われてた令嬢に一目惚れして所属組織を裏切るって、お前、マジか!？」
「……フン、笑いたければ笑え。この気持ちに偽りはない」

ちなみにルミアは、改めてシユバルゴに好意を抱かれているという事実を再確認して、頬を染めて机に突っ伏している。

アルフォネア邸に来てから、どうにか最悪の初対面からの関係改善をしようと努力し

てきた結果であり、ルミア自身のシュバルゴに対する好感度が上がった証左と言えるだろう。

まあ、どちらかと言えば恋・懸想といったものではなく、会ったことの無い父親をシュバルゴを通じて幻視しているような感じではあるが。

「あー、ココ最近で一番笑ったわ。それに、ここなら研究会の手から逃れるにはうつつけなのは確かだし、納得もいった。にしても、急に一時的な休暇を言い渡されたと思ったら、こういう事かよ」

「……イヴⅡイグナイトもオレ達のことを信用しきれない故の監視役か。だが、イヴⅡイグナイトが上に報告しなかったということは、それなりにはオレやホークを信用してくれたと見ていいのか？」

「知らねえよ、あんなヒステリック女の考えてることなんて。……ま、ラッキーだったとでも思っておけばいいんじゃないの？ 知らんけど」

もうシュバルゴにその気は無いとはいえ、外道魔術師だった事実は変えられない。

指名手配されていなかったホークにしても、シュバルゴの援護として馬車を襲っていたことはその場にいた者たちの全てが知ることだ。

上層部にどんな報告をしたのかは分からないが、シュバルゴ達の居場所が割れておらず、イヴも特務分室室長として変わらず勤務していることから考えるに、死を偽装する

か何かしてどうにかしてくれたのだろう。

「……すぐに信用しろなど言わん、笑みの奥の警戒も貴様が満足するまで解かなくていい。オレは使用人として働きながら、ルミアを愛でる日常を送れば何も不満はないかな」

「バレてたのかよ。まあ、自分で言うのもなんだが、しばらくは懷疑の目を向けることになると思うが……それはそれとして、ここにいる間は馬車馬のようにこき使ってやるかな」

「それでいい」

こうして「愚者」、グレン＝レーダスとの和解が成ったのだった。

第六話

—— グレン＝レーダスとの和解から数日。

数日おきにルミアの遊び相手として娘……システイーナを連れてくるレナードが、今日もやって来た。

「ご苦労だな、レナード」

「フン、いつ見ても滑稽な姿だな、シュバルゴ」

会う度に軽口を叩き合う二人を、ジト目で見るシステイーナ。

初対面こそシュバルゴの強面に怯んだりしていた彼女だが、今では慣れたらしい。

いつものようにルミアが居るのであろう部屋に向かうシステイーナを見送り、シュバルゴとレナードが向かい合う。

「……そういえば最近、宮廷魔導師団が魔術テロ組織を制圧したらしいが、お前は何か情報を探んでいるか？」

「いや、何も知らんが。……【愚者】がここの所忙しそうにしているのはそういうことだったか。その程度で直接的に特務分室が出動するとは思えんが、オレの監視と兼任して外でも“仕事”とは、ご苦労な事だ」

「【愚者】？ああ、セリカIIアルフォネアの養子だったか？帝国宮廷魔導師団についてはあまり知らんから実力は分からんが、特務分室ならさぞ凄腕なのだろうな」

世間話をしていると、システイーナがルミアを連れて戻って来た。

「どうやら、ルミアをフィーベル邸に招待したいらしい。」

ルミアも一緒にシュバルゴの顔色を伺ってくるあたり、乗り気ではあるのだろう。

「ようやく明るくなってきたルミアの表情を曇らせるようなことが言えないシュバルゴの答えは決まっていた。」

「ああ、特に問題はないが。いや、だが、そうだな……ルミア、これを持っていけ」

シュバルゴはルミアに、自身が持つ二つの石型の魔道具の片割れを手渡す。

「落としさえしなければ魔道具同士が引き合い、もう片割れのある方角が分かるようになっている。」

「ないとは思いたい、これでルミアに何かがあっても居場所を特定出来る。」

「絶対に落とすな。何かがあつたと分かったら、すぐに駆けつける」

「は、は、は」

「……よし、理解したなら、行くがいい」

シュバルゴが許可を出すと、システイーナがルミアの手を引いて駆け出していく。

「帰りも送っていくことを約束したレナードがそれを追いかける。」

「……テロ組織、か。調べておく必要があるか？」

顎に手を当てて考えるも、既に壊滅した組織を調べても意味はないと思い至り、邸内の掃除を続けるのだった。

時間が経ち、昼食後の運動がてら庭の掃除をしていると、キーン、と通信の魔導具が鳴り響いた。

相手は、レナードだ。

「……どうした？」

『……すまん、ルミアが連れ去られてしまった』

「——何？ 貴様が居て、そのザマか？」

『く、ううう、システイも一緒になア！ ぶざけおつて……！ 私可愛いシステイをよくもおツ！』

「チツ、直ぐに出発する。貴様は今何処にいる！」

女王にも連絡したらしいレナードを回収して、魔導具の情報とレナードが持つ手紙を頼りにルミアの居場所を特定していく。

「それで、貴様程の男がまんまとしてやられた理由を聞いていないんだが」

「何故かは分かんが、二人で家の外に出て行ってな。庭で遊んでるのを見て、大丈夫だ

ろうとちよつと目を離した隙に……いつの間にか居なくなっていた」

「……………、馬鹿か貴様？」

「そして、二人が居なくなつた庭の真ん中に、テロ組織からのこの手紙があつてな。『返して欲しくば、金を用意しろ』、と」

「身代金目当てとなれば、国外逃亡を画策するテロ組織の残党か。チツ、やはり調べておくべきだったか」

朝の自分を殴りたい衝動に駆られるシユバルゴだが、誘拐された事実是不変ならない。

——と、二人の足が止まる。

「……随分と、おあつらえ向きな場所があつたものだな」

「これが終わつたら、全部伐採してやろうか……？」

フェジテ郊外に広がる樹海。

手紙が示し、魔導具が指し示すルミア達の居場所は、その更に奥で間違いないようだった。

#

「はは、上手くいつたな、ゲイル？」

「ああ、どつちがフィーベル家の令嬢か分からなかつたから二人とも攫つてきたが、大正解だった！一人は金と交換だし、もう一人も商人に売ればまた金が入る！」

「商人に売り飛ばす暇なんてないよ、馬鹿共」

「あ、カリツサの姉御！じゃあ、俺たちで楽しんでしまつていいですか！」

「ちよつと待ちな。フィーベル家の令嬢と一緒に居た娘……金に関してはフィーベルの娘と引き換えての身代金で充分だが、どうにも気になるねエ？」

下劣な会話が耳に入り、意識が覚醒する。

朦朧としながらも、今の状況を確認しようと辺りを見回す。

両手が縛られて口も塞がれており、隣には同じ状態のシステイーナが転がされてい
る。

「おお？これから酷い目に遭う方のかわい子ちゃんが目を覚ましたようぞー！」

「ひっ」

気持ちの悪い笑みを浮かべながら近づいてくる男たちを恐れて後ずさりするルミア
だが、背後は壁で背中をぶつける。

その弾みで懐にあった物が床へと飛び出した。

カラン、とかわいた音を鳴らしたそれは、シュバルゴに貰った魔道具。

純粹な好意をぶつけてくる、父親が居ればこんな感じなのかと幻視する男から初めて
貰ったもの。

大事にしまっていたはずのソレを取り戻そうとして——

「あ？なんだ、コレ？」

ルミアの指が触れる前に、男の一人に奪われる。

少しでも魔術の心得を持つものならばすぐに魔道具だとわかるソレを、ルミアの表情から大事なものだと察した男が、ニヤリと笑みを浮かべて。

「《雷帝よ・鋭き針雷以て・刺し貫け》」

威力半減・鋭利化の即興改変をした「ライトニング・ピアス」が、魔道具を貫き砕いた。

砕かれた魔道具は、ルミアの目の前でパラパラと崩れ去る。

「あ、あああ……」

唯一の、”ルミアを必要としてくれる人から貰ったもの”——心の拠り所になり得たものが、喪失した。

「あああああああああああ!!」

じわりと、涙を浮かべて絶叫するルミアを見て、男たちは笑う。

唯一、女の魔術師はため息を吐いて「趣味が悪い」とつぶやくが、止める気配はない。

そしてその騒がしさからか、システイーナの意識が覚醒する。

起きてすぐ、ルミアの悲嘆の声とそれを笑う男たちがシステイーナの目に飛び込んできた。

「何を笑っているのよ！ルミアを泣かせて、許さない！」

仮にシステイーナだけが誘拐されていたならば、幼いシステイーナの精神では怯えて動けなかっただろう。

だが、既に絶望して取り乱すルミアの存在が、システイーナの頭に血を昇らせたのが不味かった。

啖呵をきつたシステイーナの言動は、男たちの癪に障つたらしい。

明らかにキレている男の一人の蹴りが、システイーナの鳩尾に入った。

「ゴブツ!?ゲホツ、オエツ」

「何をやってんだい。そっちは金と交換するんだから、あまりやり過ぎるんじゃないよ
！」

「あー、つい勢いでやっちゃまったつす、すいません姉御。まあ、金髪ちゃん……ルミアって言ったつけ？犯して機嫌を戻していいですか？」

「フン……ダメ元で天の智慧研究会に引き渡すから、殺しはなしだよ」

「こいつ、そんなビッグネームが欲しがる奴なんですか!？」

「確定じゃないが、その可能性があるっただけだよ。下手したらかの組織に仲間入り出来るチャンスになりうるからね……死なせたらあんたの命もないと思いな」

「了解つす、姉御」

そうして、ゲイルと呼ばれた男がルミアに近づいていつて——

「うるっせえなツ!!イライラするから黙れよ」

未だに大声で泣いていたルミアの顔を蹴り飛ばす。

廃墟に存在する放置されていた木箱に激突するが、湿気で脆くなっていたのか、硬い木材にぶつかるよりは大した傷は無い。

「あぐっ、うう……」

「さくてと……楽しませてもらおうかなあ〜?」

ゲイルの手が、ルミアの胸元に伸びていき——しかし。

慌てた様子で部屋に入ってきた別の男の言葉で、その手が止まる。

「大変だ、カリツサの姉御! 帝国宮廷魔導士団が……それも、あの『特務分室』が動いてる!」

「なんだって!」

一気にその場の緊張が高まる。

話によれば、コードネーム【星】と【女帝】の二名によって潜伏していた別働隊が全滅。

さらに、【愚者】がこちらに向かっているという情報。

あまりにも突然の出来事に混乱する一同だが、逆にルミアの正体を察したカリツサは

口角を上げる。

確かにこの状況は不味い。

だが、向かってきているのは【愚者】一人であり、対するこちらは百戦錬磨の魔術師が多数存在する。

つまり、【愚者】一人の猛攻を防ぎきれば、天の智慧研究会での地位が確立されるのだ。

「あんたらはこの娘を見張っておきな。絶対に逃がすんじゃないよ！いいね!!」

「了解です、姉御！」

だが、カリッサはこの判断が間違いだっただけだと思えることになる。

敵は【愚者】に加え、娘であるシステイナを取り戻す為に修羅の表情で迫る魔導省のエリートと、想い人であるルミアを救い出す為に鬼の表情で疾駆する元・天の智慧研究会第二団【地位】の、二人の超一流の魔術師が存在しているのだから。

第七話

魔導器の反応が消えたことを受けて、いよいよ不味い状況になってきていることを感じたシユバルゴは、追走するレナードと共に走るペースを早める。

鬱蒼とした木々を躲しながら直線上に沿って進むと、拓けた場所に廃墟が現れた。

廃墟の周りを巡回する人を複数人確認した二人は、奇襲をかけるために魔力を練り上げる。

「《吠えよ炎獅子》」

「《暴風の戦鎚よ》！」

シユバルゴの「ブレイズ・バースト」と、レナードの「ブラスト・ブロウ」は混ざり合い、爆炎風となつて巡回者達を消し炭にするだけでなく、廃墟の一角をも破壊した。

崩壊した一角から廃墟に侵入し、攫われたルミアとシステイーナを探して駆ける。

「もう来やがったのか!?!しかも、二人!!」

「来るのは一人じゃなかったのか!どつちが【愚者】だ!?!」

「【愚者】?なるほど、特務分室も動いたか」

「ありがたい、救出がしやすくなる……!」

爆音を聞いて集まってくる魔術師達の言葉から必要な情報を読み取り、共有する。

レナードが事前に女王陛下宛に情報をリークした結果だろう。

誘拐されたルミアを救い出そうとする動きから察するに、彼女が帝都から追放された理由は未だ明確に聞いてはいないが、ルミア自身が思い込んでいる『要らない子だから』……という訳では無いらしい。

まあ、執拗に狙ってくる研究会から逃がすという側面もあるのかもしれないが、それだけであれば王宮で嚴重に保護する方が確実だろう。

ここで考えても仕方がないか、と思考を切り上げ、シュバルゴは「アイス・ブリザード」を放つ。

圧倒的な冷気と氷の散弾が敵を襲うも、相手もまた凄腕の魔術師達。

先程のような奇襲ならまだしも、「アイス・ブリザード」を「フォース・シールド」で防ぐなど、正面からの攻撃には適切な対処が出来るくらいには実力派である。

「チツ、面倒だな」

「《言ってる・暇があったら・戦え》!!」

シュバルゴに対して文句を言いながらも発動するレナードの「ブラスト・ブロー」。

即興改変のために威力は下がるが、相手の行動を制限する目的には十分だ。

そして、風の暴力を防ぐ、又は避ける時間があれば、相手に痛手を与える準備時間と

しても十分。

「《金色の雷獣よ・地を疾く駆けよ・天に舞って踊れ》……!!」

B級軍用魔術、『プラズマ・フィールド』。

無差別広域殲滅呪文による雷撃の嵐のフィールドが、相手の魔術師達を飲み込んだ。

#

シユバルゴ達の突入の数刻前、人質である二人を見張る魔術師達。

そのうちの男の一人……ゲイルが身体を震わせて叫んだ。

「ああ、もう我慢ならねえ!」

「おいおい、ついに気でも狂ったか、ゲイル?」

「うるせえ、直前で寸止めされて我慢出来るわけねえだろ!【愚者】とはいえ、数で囲んじまえば終わりだろ。見張り番になった俺たちの出る幕はねえ。だったらやることはひとつだろ!」

ゲイルがルミアに近づき、服を剥ぐ。

心の支えを失い、殴られて涙も止まったルミアは絶望のまま抵抗という抵抗もせず。

そして、ルミアの柔肌を視姦しながら舌なめずりをして――

爆音が鳴り響く。

しばらく動揺で固まるも、慌ただしく動く見張り番以外の仲間の足音を聞いて、すぐ

に静かになると決めつけて情事を続けようとするゲイルだったが……。

「おい、貴様」

聞き覚えのない声。

少なくとも、見張り番に割り当てられた仲間のものではない声に、ゲイルは戦闘体制をとりつつ振り返る。

視線の先には、同じく戦闘体制を整えて警戒する仲間達と、

「その娘は……貴様が触れていい人ではない」

——怒気を纏った悪鬼が居た。

廃墟内の分かれ道でレナードと別行動となったシュバルゴは、迫り来る魔術師達を黒魔【サイレンス・サイン】……気配遮断の魔術を用いてやり過ぎし、ルミアの下へと辿り着いた。

後に聞こえてくる轟音から察するに、レナードは馬鹿正直に戦闘しているらしい。

ルミアを辱めようとしていた男を睨み付けつつ、この状況をどう打破するかを考える。

相手魔術師は五人、シュバルゴよりも格下とはいえ人質二人を守りながら戦って勝てるほどの実力差ではない。

——そうして考えていると、シュバルゴが思いもしなかった切り口での攻略が可能だが、魔術師のうちの一人の言葉で理解できた。

「アンタ、もしかして、シュバルゴ⇨モータナスか!? 天の智慧研究会の、第二団【地位】!! 【堕ちた剣】のシュバルゴだろ!」

良くも悪くも、天の智慧研究会としてのシュバルゴの悪名が功を奏した形だ。

既に裏切り者の烙印を押されたものの、知らない者からすればかの組織の二番手に位置する実力者集団の一人。

使える立場を使わない手は無い。

「フン、分かったならその娘を引き渡してもらおうか? 引き換えに研究会に口利きしてやってもいい」

「本当か!」

「おい、ゲイル! 少しは疑えよ。姉御が連絡してから来たにしては早すぎる。お前がシュバルゴ⇨モータナスだと証明出来るものはあるか?」

ゲイルの仲間の一人が警戒心を露わにして証明を求めろ。

対するシュバルゴが持つ証明するための物は一つのみ。

研究会の刺青を焼き消したために、モータナス家の宝剣……レイピアを見せる以外にない。

——しかし。

今回、ルミアの失踪を聞いて焦っていたことからレイピアはアルフォネア邸に置いてきてしまった。

ついでに言えば、シュバルゴが現在来ている服も魔術師としてのものではなく、邸内での仕事着である執事服だ。

「……大人しく、引き渡しに応じれば良かったものを」

「——ッ!?!」

不意打ち気味に、「ライトニング・ピアス」を時間差起動。

しゃがんで斜めから口を狙った雷閃は、証拠を求めた男の言語機能を停止させるに足り、実質無力化した。

「て、てめえ!?!」

「全員でかかるよ!! 《吠えろ炎獅子》——!」

「ああ、《氷狼の爪牙よ》!!」

「《雷帝の戦槍よ》!!」

動揺するゲイル、魔術を唱える他三人。

起動すれば、一斉に迫る三種の軍用魔術はシュバルゴの魔術抵抗を貫き、無事では済まないだろう。

——起動さえ、すればだが。

「……な、に……？」

「馬鹿な、私達の魔術が、起動しない……!？」

困惑、驚愕。

魔術師達の思考がふたつの感情で埋め尽くされる。

シュバルゴが振り返ると、この現象を起こした人物が大アルカナ……【愚者】のカードを掲げていた。

固有魔術【愚者の世界】。

一定範囲内のあらゆる魔術起動を封殺する魔術が、展開されていた。

「よお、シュバルゴ。忘れ物、だつてよ。お前の弟子から」

「……フン、余計なことを」

アルフォネア邸に忘れてきたはずのレイピアを投げ渡してきたのは、帝国宮廷魔導師団、特務分室の執行官ナンバー0……グレン||レーダスだった。

通信の魔導具でセリカに連絡を入れて置いたのが功を奏したのか、ホークも学院での仕事から抜け出して救援に来ているらしい。

「んじゃあ、こっからは蹂躪だ。せつかく剣を持ってきてやったんだから、ちゃんと戦ってくれよ、ウチの下僕さんよ」

「……いいだろう。それが主の息子としての命令であれば、最後までやり通すとも」

魔術起動が出来ない場で、レイピアを構えるシュバルゴと、事前に「ウエポン・エンチャント」を両手に付与してきたグレンの二人が、未だ混乱の渦中にある魔術師達を相手にほぼ同時に動いた。

シュバルゴが二人の魔術師をレイピアで切り刻み、グレンの拳が残る二人を気絶させる。

グレンが魔術師を殺さなかったのはその甘さと余裕があつたことからだ、シュバルゴも殺しはしなかった。

理由はルミアがいる手前、あまり死体を見せたくなかつたためだ。

だからこそ、最初の「ライトニング・ピース」も頭を狙わなかつた。

「——ルミア、無事か？」

戦っている最中もずっと放心状態だったルミアに声をかけるシュバルゴ。

声を聞いて顔を上げるルミアの目が、シュバルゴの顔を捉える。

「しゅ、びるいん……」

「ああ」

「——う、うう。ああああああああああ!!」

シユバルゴが来てくれたことを理解した瞬間泣きじやくるルミアの身体を抱き寄せ
る。

しばらくして、泣き止んだルミアは羞恥で顔を真っ赤にしながらシユバルゴの顔を見
上げる。

「遅くなつてすまなかつた。だが、もう大丈夫だ。オレだけでなく、【愚者】やレナード
も来ているからな」

「レナードさん……? そういえば、システイは……!」

レナードの名前を出した瞬間、思い出したかのようにルミアがシステイの方を見
ると、グレンが介抱していた。

「ん、無事だな。ちよつと手ひどく痛めつけられたみたいだが、後遺症どころか傷も残ら
ねえだろうよ」

「よ、よかつたあ」

白魔【ライフ・アップ】を使用しながらそれぞれ少女を抱き上げる男二人。

後はレナード・ホーク両名と合流し、ここから脱出して人質だった二人を安全な場所
に送り、特務分室の増援部隊とともに残党を一掃するだけだ。

「……よし、【愚者の世界】の効果は切れたぞ」

「そうか。ならば、行こうか。ルミアは少し寝ているといい。余裕がなくなったら、不快なものを見せてしまうやもしれんからな」

シュバルゴができる限りの隠蔽魔術を自身を含めた四人に重ね掛けをし、一行は脱出に向けて行動を開始した。

第八話

結果的に言えば、脱出は容易だった。

気配を消し続けたうえで接敵したら「愚者の世界」で相手の魔術起動を封殺して気絶させる、というサイクルを繰り返すことで味方との合流・廃墟からの脱出の両方を達成できた。

後はルミアとシステイーナを安全な場所に移動させて援軍と合流し、残党を殺害・捕縛するのみ。

だが、そうやすやすと話が進むわけでもなかった。

自身に発動させておいたシユバルゴの固有魔術【魔術知覚】が反応して警戒音を鳴らす。

それと同時に、感じたことのある悪寒が全身を駆け巡る。

「【愚者】。ルミアを頼む」

「あ？急にどうしたんだよ？」

レナードと合流した際にシステイーナを引き渡し、手が空いていたグレンにルミアアを押し付ける。

ちなみに自身を救ってくれた一人であるグレンから離れた際、残念そうなシステイーナの声が漏れていたのは余談である。

「……何も言わずに行け。オレがケリをつけねばならん問題だ」

「……、分かった。ちゃんと帰って来いよ」

「フン、分かっている」

並走していた足を止めたシュバルゴは、遠ざかる足音を聞きながら振り返る。

そして、木々の間をにらみつけて言い放った。

【大導師】……そこにいるのだろうか？」

「……あはは、ちゃんと気配を消していたのに、やつぱりバレてしまうか。気配を断つことにおいては僕ですら君には及ばないみたいだ、シュバルゴヘヴンス・オーダーモータナス」

特別太い幹の木の陰から現れたのは、天の智慧研究会第三団ヘヴンス・オーダー【天位】、最高指導者【大導師】……フェロードベリフだった。

「よもや、貴様が出張してくるとはな。狙いはルミアアか？」

「まあ、その好機があれば攫っていくつもりではあったけれど、本命は君さ。【双生児の紋章】による神秘体験を経て、第二団アデプタス・オーダー【地位】に昇格した君が、本当に天の智慧研究会を

裏切るのかどうかを、最終確認に、ね」

神秘体験。

研究会の入り口である下つ端……ポータルス、オーダー第一団【門】から真の意味で内陣インナーと呼べる第二団

【地位】へと階級が上がる上で魅せられるもの。

四次元、五次元、六次元、七次元——果ては、集合無意識の八次元世界をも認識し、禁忌教典を手にする体験。

魔術師であれば誰もが目指す極地であり、あまりの幸福感から並大抵の者ならば現実に戻ることにすら叶わずに廃人となる。

確かに、シユバルゴも体験し、涙した。

無限の叡智と幸福を捨て去りたくないとさえ思った。

だが、しかし。

それでも、シユバルゴが現実に戻ってこれたのは。

どれだけの叡智を持っていようとも、魔術師としての幸福がそこにあるうとも、人としての幸せをつかんでいない。

人生のパートナーと出会い、人としての幸せを享受したい。

思えば、シュバルゴの結婚願望の芽生えは、神秘体験を経てからだった。

そして三十路近くなってようやく、年の差はあれど、好きだと想う、護りたいと思える人と出会ったのだ。

だから。

「後悔などしていないとも。オレにはもう、外道でいる理由はなくなったからな」

「……へえ？よっぽどの心境の変化のようだね。僕としては、【魔将星】になりうる君を手放したくはなかったんだけど。そこまで決意が固いなら仕方がないか」

不気味な笑みを浮かべて、フェロードは踵を返す。

「今回は確認だけで済ませるよ、シュバルゴ。君とはそう遠くない未来でぶつかると思いうけれど、それまでに死んでいないことを祈っているよ」

「フン。ルミアは貴様らには渡さん」

この時点を以て、【墮ちた剣】シュバルゴ―モータナスの天の智慧研究会の脱退が明確に決定的となった。

#

「にしても、久々に聞いたな……【墮ちた剣】」

「オレの家は代々王室親衛隊のエリートを輩出してきた名家だったからな。そんな名家の子が外道に堕ちたことからその名が広まっただけの事だ」

全てが片付き、アルフォネア邸へと帰る道中でグレンが話題に出したのは、シュバルゴの外道魔術師としての異名。

最も、兄弟と比べて剣の才能がなかったために、シュバルゴはこの異名は自分には相応しくないと思っているが。

「研究会から足を洗った今、異名も変えていったほうがいいんじゃないっすか？」

【堕ちた剣】という異名について考えていたら、いきなりホークがそんなことを言い出した。

確かに外道魔術師としての自分と決別した今、この異名を今後も呼ばれ続けるのは遠慮したいが、だからといって新しい異名が欲しい訳では無い。

だが、何やらグレンとホークの目がキュピーンと擬音がつきそうなくらい光っているように見えた。

「良いじゃねえか！俺らでお前の異名、作ってやるよ！」

「何……？」

「いいっすね！うーん、例えば、ロリコン王とかどうっすか？小さい女の子に恋をしちゃったことと、偉そうな態度な師匠にピツタリだと思っくんっすけど」

「馬鹿か、こんな奴に王なんて称号与えんじゃねえよ！ロリコン伯爵で十分だ、十分！」
「おい、貴様ら……」

好き勝手ふざける二人に対する怒りから、額に青筋が浮かぶシュバルゴだが、ルミアを背負っているために反撃に移れない。

身体を震わせながら二人の煽りを耐えていると、疲れからか眠っているルミアの寝言が飛び出した。

「い、いや……すて、ないで……」

ピタリと止むバカ騒ぎ。

ルミアの一言によって凍りついた場を動かしたのはシュバルゴだった。

「……フン、貴様はオレが護る。絶対に、一人にはさせぬ。今は、安心して眠るがいい」
片腕でルミアを背負い、もう片方の手でルミアの手を握る。

しばらくして苦しそうだっただ寝顔は柔らかくなっていき……。

「お、とう………さん………」

最後にそう言って、深い眠りに入ってしまった。

しばらくの間は沈黙していたバカ二人だったが、ルミアのお父さん発言と、シュバルゴの得意魔術が気配遮断に特化していることから、新たな異名が【影父】に決定した事

は余談である。

#

「シユバルゴ……本当に、君は予測できないな。予想外を起こされたのはこれで二度目だよ」

フェジテと帝都オルランドを結ぶ道のりの道中。

不気味な笑みを浮かべながら、「大導師」フェロードIIペリフは呟く。

「二度目は神秘体験の時。当時は第一団【門】だった君があの場合にいた事もそうだけど、禁忌教典を手にする体験を乗り越えて現実に戻ってくるなんて思いもしなかった！本来であれば第三団【天位】として真の内陣に招待するための試練を!!」

呼んでもいないのに秘匿していたはずのアジトの一つを突き止めて「大導師」たる自分に会いに来たシユバルゴに対して、手っ取り早く廃人にして隠滅しようとする【双生児の紋章】を使ったのにも関わらず、予測を裏切って現実に舞い戻ってきた。

まさか戻ってくるとは思っていなかったフェロードは彼に【魔将星】の資格があることを見抜いたが、下っ端である第一団【門】の魔術師がいきなり第三団【天位】に昇格するのは前代未聞。

とりあえず部下が欲しいと言っていたラザールの部下として第二団【地位】に昇格させた訳だが……。

「二度目に、研究会からの脱退。禁忌教典を手にする体験を経た上で、この時期になつてからの脱退……。魔術師ならば喉から手が出る程焦がれ、無限大の幸福を得る体験は、シユバルゴも例に漏れず研究会に生涯忠誠を誓うくらいに衝撃を与えた筈。だと言ふのに！」

それを上回る衝撃があつたとしても言うのか。

シユバルゴは衝動的だつた最初だけのみならず、時間を置いた今回すらフェロードを相手に脱退すると啖呵をきつた。

「イレギュラー異常個体……いや、スベシヤル「特異個体」とでも名付けようか。君の行く末が、本当に楽しみだよ……！」

人として異常と言うよりは、興味深い者として特異。

シユバルゴのことを「特異個体」と命名したフェロードは、笑みを絶やすことなく歩き続けた。

学院襲撃事件（一卷）

第九話

攫われたルミアとシステイーナを助け出す出来事から数年がたった。

数年の間に様々なことが起きた。

システイーナの祖父、レドルフ・フィーベルの死。

特務分室の一員であった【正義】の裏切りと【女帝】の死、それに伴う【愚者】グレ
ン・レーダスの特務分室脱退。

ルミアとシステイーナのアルザーノ帝国魔術学院入学など。

大まかなところでいえばこのくらいか。

そして、ルミアたちが二年に上がってしばらく経った日の朝。

特務分室を脱退してからというものの、別の働き口を探すこともせずにだらだらと過ごすだけのグレンに対して、遂にセリカがキレた。

「いつまで私のヒモになってるつもりだよ、お前?! いい加減に働けよ!!」

「いいじゃねえか、俺を一生養うぐらいの余裕、あるだろ!？」

「食っては寝る毎日を繰り返すお前の情けない姿、もう見たくないんだよ!! それでいて

小間使いも遠慮なく振り回すし！」

この場にシユバルゴはいない。

穀潰しのグレンとは違って、邸内の家事や命令を卒なく熟す万能執事は、主人たるセリカの息子であるグレンの命令で買い出しに出掛けていた。

「とにかく！学院の講師が人事異動で一枠空いたから、お前をそこにねじ込む！期間は一ヶ月で、免許諸々は私の権限でどうにかする。拒否権は無いからな!!」

「ちよ、はあ!?!魔術講師って、お前——」

「《其は摂理の円環へと帰還せよ・五素は五素に・象と理を紡ぐ縁は乖離せよ》」

グレンが文句を言おうとした瞬間、放たれた「イクステインクシヨン・レイ」がグレンの真横を通り過ぎて、背後の壁に丸く切り抜かれたかのような大きな穴を空けた。

「文句があるなら言えよ?ただ、次は外さん」

「ま、ママああああああああ——ッ!!」

こうして、グレンは半ば強制的に魔術学院の非常勤講師として働くことが決まった。

#

グレンの出勤日当日。

セリカは用事があつて一足先に学院に向かっているが、セリカが居なくとも同僚となるHOOKがいるし、何よりシユバルゴがサボることを許さない。

初日早々病欠しようとしていたグレンがシュバルゴの手によって強制的に外へと放り出されると、そこには。

「あ、やっと来ましたね!? 今日から私たちの先生になるんですから、絶対に逃がしませんよー!」

「おはようございます、グレンさん」

どこか嬉しそうな……期待の目で見てくるシステイーナと、苦笑いしつつも落ち着いた様子で挨拶してくるルミアの二人がいた。

「って、お前らの担任ってマジか!? どんな偶然だよそれ!」

「ほら、行きますよー!」

誘拐事件で救われてから、何かとグレンに付きまとうようになったシステイーナは、グレンの手を引いて歩き出した。

グレンが軍を辞めた理由もそれとなく聞いていたため、アルフォネア邸で引きこもり生活をしてきたことにも理解がある分、久々の外へ出る機会を機にニート脱却を目指そうと息巻いていた。

「それじゃあ、シュバルゴさん。行ってきますね?」

「ああ、気をつけて行くがいい」

出かける際の挨拶を交わした後、さらにシュバルゴはルミアの頭を撫でる。

誘拐事件以降から不安そうな表情が尽きなかったルミアを元気づけようとしてルーティンとなった行動である。

それなりに成長したと判断した時に一度やめたこともあったが、シュバルゴにすら見捨てられてしまったのではないかと不安になったらしく、表情が戻ってしまったために継続することとなった。

気持ち良さそうにされるままになっているルミアを見て、今日も一日頑張る気力を得たシュバルゴは撫でる手を止めて背中を押す。

今日も見捨てられていないと、帰る場所があることを確認できたルミアは、満面の笑みを浮かべて先に行ってしまったシステイナとグレン、ホークに追いつくべく走り出した。

#

「……今日から一ヶ月の間、お前らの担任になるグレン＝レーダスだ。早速だが、今日は授業は行わない」

本来正史であれば、黒板に大きく自習という文字を書いて教卓に伏せっていたグレンだが、今回は違った。

知り合システイナいが滅茶苦茶キラキラした目で見てきていたためだ。

サボりたい、働きたくない——そうは思うが、誘拐事件後から今も尚慕ってくれ

ている少女の期待を真つ向から裏切れることは、流石のグレンにも出来なかつた。

結果——

「先ずはこれまでの授業でどんな事を学んだか、どこまで進んでいるのかを教えてください」
まともにならざるを得なかつた。

とりあえず今日は、生徒達の学習がどれだけ進んでいるかの確認の日にすることにした。

何せ、いきなりねじ込まれただけで、何も聞かされていないのだ。

初日は授業をする上での準備時間にせざるを得ない。

……と、そう判断したグレンだったが、とある生徒の一言で一時限分はまた別のことに使われることになった。

「先生！まず先生のことについてもつと知りたいんですけど！」

確かに、グレンは自分の名前しか伝えていない。

これから一ヶ月とはいえ、担任として魔術理論を教えるために親睦を深める時間は必要だろう。

「……おう、答えられる範囲でなら何でも答えるぞ」

こうして、生徒達によるグレンへの質問攻めが始まった。

セリカの推薦だということが広まっていたためにその関係性を聞いてきたり、前職は

何だったのか、また、魔術階梯がいくつつか……など。

様々な問いに、たまに真実をぼかしつつ答えていった。

第三階梯だと答えたら露骨に残念そうな雰囲気を出してきたが、それ以外はつつがなく答え、一時限目の授業時間は終了した。

そして、二限目以降。

教室に向かう前に渡された教科書を流し見しつつ、生徒たちの魔術知識や前任の授業方法を確認していく。

結果、教科書の内容は上辺だけで魔術理論の詳しい説明は全く載っておらず、生徒の知識も範囲は広いが内容はとても浅い。

更には前任の授業のやり方も教科書に沿っていたため仕方がないのかもしれないが、とりあえず覚えればいいとしても言うように適當。

折角魔術を学ぶ上での最高の設備が整っている学院の環境が全然生かされていない現状にグレンはため息をつき、明日からの授業の準備のために昼休み以降の授業をとりあえず自習ということにして教員室に籠るのだった。

#

翌日。

早々に教科書を投げ捨てたグレンは、生徒達に言い放った。

「今日は黒魔【シヨック・ボルト】を題材として魔術理論の授業をしていく」

瞬間、文句の嵐がグレンを襲うが、気にせず言葉が続ける。

「お前らの文句も仕方ないと思うし、【シヨック・ボルト】なんてとつくに極めたとか考
えてるやつも多いと思うが、取り敢えず今日は聞いてけ。終わった後で全然役に立つて
ねえっていうんだったら、またやり方考えてくるからよ」

そう前置きして生徒達を黙らせたあと、すぐに学院中を震撼させることになるだろう
グレンの授業が始まった。

第十話

グレンが真面目に授業をしている頃、シュバルゴはセリカに呼び出されてアルザーノ帝国魔術学院の学院長室に来ていた。

「それで、わざわざオレをここまで呼び出す程の用とはなんだ？」

「まあまあ、学院まで来させたのは悪かったけど、そんな嫌そうな顔するなよ。お前にとっても悪い話じゃないからさ」

だる絡みしてくるセリカに対して不機嫌な表情を隠そうともしないシュバルゴの態度に心配になる学院長……リックだったが、セリカは気にせず話し始めた。

「今、グレンが担任として受け持っているのがルミアも在籍しているクラスなんだが、前任がいきなり失踪したせいで授業が数時間分遅れていてな。近々魔術学会で講師陣の大半が席を外す関係で学院は休みになるが、グレンのクラスだけ補講という形でその日に授業をやることになった」

「ふむ、それで？特に主の小間使いとしてのオレには関係がない話に聞こえるが」

シュバルゴは元とはいえ天の智慧研究会だった犯罪者であり、本来はこうして魔術学院に居ることも憚られる人物だ。

担任となったグレンはまだしも、シュバルゴに関係のある話とは思えないが……。

「それがだな……人がいなくなる関係上、生徒たちの安全確保のためにも警備を強化しようって話が出てな。まあ、学院には結界が張られてるし、部外者は絶対に入れないから大丈夫だとは思うが、人を増やすことも選択肢の一つとして挙がったんだよ」

「それで、警備人員として元・外道魔術師のオレを採用するということか？ それこそ、学院の信用の失墜につながりかねないと思うが」

「いや、まあ、それもそうなんだが、これは建前でな。最近、天の智慧研究会の動きがキナ臭くてな。ルミアが研究会に狙われているのはお前も知っての通りだろ？ グレンは担任だからクラスの生徒全員の面倒を見なきゃいけない関係上、ルミア一人のための護衛を雇おうと思ってな。んで、凄腕で事情を理解している魔術師はお前ぐらいしかいない」

セリカが表立ってルミアのために行動すれば、ルミアⅡエルミアナ女王ということがばれる可能性が出てくる。

グレンは担任という立場上、特定の生徒だけのために行動し続けることはためらわれるし、話題には出していないがホークも3年の担任である。

学院に在籍中の魔術警備員にルミアの事情を漏らすわけにもいかず、シュバルゴに白羽の矢が当たったらしい。

「表向きは学院内の見回り業務を行う新人警備員として雇うが、ルミアに危険が及ぶ可能性が出たら好きに動いていい。給料もちやんと出す。どうだ?」

「……オレは別に構わんが、この話は主が一人で決められることじゃないだろう?」

言いながら、シユバルゴはリックに視線を移す。

「この学院の長はお前だろう。オレを雇うことに反対はしないのか?」

リックはしばらくシユバルゴの目を見返して、大きなため息を吐いた。

「まあ、正直セリカ君の提案には度肝抜かれたよ。いくらセリカ君が安全だと言おうと、君は元犯罪者。君を雇うのは不確定要素が多くて危険じゃと、思っていた……が」

リックは一拍置いて言葉を続けた。

「自身を雇うことによって学院の信頼に影響を与えないか心配したり、セリカ君の話を聞いた上で独断で決めることなく儂に意見を求めたり……とても、噂に聞く外道には思えなかった。君ならまあ、大丈夫じゃろ」

意外に好印象に捉えられていた事に困惑するシユバルゴだったが、学院長であるリックからの事実上の雇用許可の判断に否と応える訳にもいかず。

「……了解した。学院長の許可を得られて、主の命令であるのなら是非もない。ルミア護衛任務、全力で事にあたる」

「ちよつと言葉遣いが尊大なのが玉に瑕じゃな」

「すまんがコレは染み付いた癖だ、そう簡単には直らん。直す気も起きん」

リックから漏れる唯一の不満だったが、直そうとも思っていないシュバルゴだった。

#

そして、魔術学会当日。

家を出る時間になっても起きてこないグレンを叩き起し、家を出る準備に追われるグレンを置いてシュバルゴは先にルミアと共にアルフォネア邸を出た。

「今日から私を護衛してくれるんですね…?」

「ああ、表向きは警備員だから四六時中一緒にいる訳では無いがな。なにか不都合でもあるか?」

「いえ、全然!その、時間が空いたら会いに行つていいですか…?」

不安そうな表情で顔色を伺つてくるルミアを見て、シュバルゴは首を縦に振った。

「勝手に来い。一々確認などせずとも、オレがお前を拒絶することは絶対に無い」

「……!はい!」

道中でシステイナと合流して、三人で学院にまで辿りついた。

門を守っている同僚になるだろう二人と挨拶を交わし、結界を通り過ぎる。

ちなみにシュバルゴの名をそのまま使う訳にも行かず、学院ではシユルツⅡモルテナスという偽名を使うことになった。

名を呼ばれる機会は同僚や知り合い以外滅多にないだろうが。

「それではな。もうしばらくくすれば、【愚者】も来るだろう」

「はい。お昼休憩の時に、会いに行きますね?」

「……了解した」

昼食と一緒に食べることを約束して、シュバルゴは一人で学院内を見回る。

今日という日が、平和とはかけ離れた……非日常の始まりの日だということも知らずに。

数十分が経ち、未だにグレンが来ないことに困惑する生徒たちの前に現れたのは、二人の男。

一人はニヤニヤとした笑みを貼り付けていて、もう一人は眉間に皺を寄せている。

「あ、貴方達、どうやってここに!? 門にいた警備員は……」

「あく、二人居た門番ねえ。そいつら、殺したわ」

「ふっ、ふざけないで! 戦闘訓練を受けた一流の魔術師である学院の警備員が、そんな簡単にやられる訳——」

「《ズドン》」

瞬間、魔法陣が浮かび上がり、飛び出す雷閃。

黒魔【シヨック・ボルト】とは似ても似つかない威力を持った雷の矢は、抗議していたステイナーナの頬を掠めて背後の壁を貫通した。

C級軍用魔術【ライトニング・ピアス】。

一撃で人を殺し得る雷閃を放つ魔術を、一節……それもたった三音で発動させた男の技量は、その場の生徒全員に警備員を殺したという言葉信じさせるには充分すぎた。

「これで信じてくれたよな？」

「……おいジン、あまり時間をかけるな。結界の設定を変えたとはいえ、魔導士団の連中に破って入ってこられたら面倒なんだぞ。時間に余裕はあるとはいえ、早く任務を終わらせるに越したことはない」

「あー、分かってるよ、レイクの兄貴」

雷閃を撃った男……ジン||ガニス||がルミアの前へと進み。

「君がルミア||ティンジェルちゃんか」

「……！」

男たちの狙いはルミア。

分かったところで、生徒たちは恐怖で動けない。

延ばされた手が、ルミアに触れる——

「……フン。オレが仕事に就いた日にコレか。主の判断は正しかったようだな」

直前で、シュバルゴが姿を現した。

「誰だ、てめえは？ 講師にも警備にも、てめえの顔はなかったはず」

「……ほう？ 学院に勤める者の顔写真を見たのか。となれば、学院内に裏切り者がいるな？」

「チツ、ジン、貴様はしゃべるな」

シュバルゴと戦って勝利することは容易ではないと感じたのか。

レイクⅡフォーエンハイムはジンに合図を出し……

《ズドドドドドドドドドド》ッ!!」

「ライトニング・ピアス」の十連射。

生徒に危害を加えさせるわけにはいかないため、詠唱^{ストク}済みしてあった「フォース・シールド」を全力展開してそのすべてを防ぐ。

「……チ、二人同時は無理か」

ただでさえ守るべき生徒が多い中、天の智慧研究会の魔術師二人を同時に相手取ることはシュバルゴにも不可能である。

で、あれば。

「《光あれ》」

黒魔「フラッシュ・ライト」による強烈な閃光が、目をかばったシュバルゴ以外全員

の目を灼く。

シュバルゴはその隙をついてジンを窓から外へと放り投げた。

「うおおあああ!?!」

「チ、貴様!!」

高所からの落下程度で死ぬとは思えないが、二人を隔離することには成功した。

その事実にはレイクが激昂し、浮遊剣が飛び出してくる。

小手調べといわんばかりに迫る一本の剣を懐から抜き放ったレイピアで弾く。

「《我・時の頸木より・解放されたし》」

黒魔「タイム・アクセラレイト」を使用し、シュバルゴの時間の流れが加速する。

速やかに無力化しようとレイピアで突きを放つが、シュバルゴの速さに反応したレイ

クは身をひねって避けた。

だが、シュバルゴはレイピアを持つていない左手でレイクの顔面をつかみ、教室の外、

廊下へと強引に放り投げて場所を変えた。

その時点で「タイム・アクセラレイト」をレジストし、「クイック・イグニッション」

でレイクの目をくらまして、デメリットである加速した分減速する間をやり過ごす。

「【目覚めよ刃】」

時間の流れが戻ったことを確認してレイピアを構えると、レイクの周りには五本の剣

が浮かんでいた。

「浮遊剣使いか、面倒な」

「何者かは知らんが、計画の邪魔をするならば容赦はせん！」

浮遊する五本の剣が、シユバルゴに向けて放たれた。

第十一話

学院への道中で襲ってきた小男を無力化したグレンは、学院の結界前で立ち往生していた。

「……どうするか」

非常勤とはいえ、講師であれば素通り出来るはずの学院の結界はグレンを拒んだ。

幸い、小男が持っていた札で中に入ることは可能だろうが、相手は天の智慧研究会。

今回襲撃してきた人数が分からない以上、たった一人で入るのは危険すぎる。

かといって、帝国宮廷魔導師団が来るのを待っていたら手遅れになる。

何より既に、「ライトニング・ピアス」の雷閃が校舎を突き抜けたばかりだ。

「ちくしょう、シュバルゴは居るはずだよな……？」

寝坊したグレンより一足先にルミア達と共にアルフォネア邸を出たシュバルゴの行方が気になる。

既に戦闘中ならば合流して共闘、隠密行動中ならば別行動して場をかき回す行動に移せるが……。

一番最悪なのは、何らかの理由でルミアたちと途中で別れてシュバルゴが学院内にい

ない場合だ。

通信魔導器は万が一の時用のセリカにつながるものしか持つてきていないため、確認を取る手段もない。

セリカに対して呼び出しをかけるも応答はなし。

「くそ、どうする？……いや、迷うことでもねえか」

半ば強引に勤めることになり、なまじ生徒に顔見知りがいるおかげでサボることもできない職場だが、それでも……生徒たちとの関係は、セラとの死別以降荒み切っていたグレンの心を幾分か癒してくれた。

要するにグレンは、担当することになった2年2組という新たな居場所を壊されたくないのだ。

自分の生徒たちを救い出すために、突入することを選んだグレンの目に、黒魔「フラッシュ・ライト」の光が飛び込んでくる。

続けて窓から投げ出される見覚えのない男の姿。

「は、居るんじゃないか」

シユバルゴはすでに戦っている。

今自分がすべきことは何か——決まっている。

「窓から投げ出した男を追わず、教室内あるいは廊下側に留まっている。つまり、シユバ

ルゴの狙いは敵戦力の分断だった可能性が高い。であれば、俺がすべきは……分断させた敵の合流阻止！」

道中襲ってきた男から奪った札を用いて学院内に侵入したグレンは、懐に忍ばせた『愚者』のタロットカードを確認して走る。

見えてくる敵の男の全貌、特に隠密の魔術をかけているわけでもないグレンに早々に気づいたらしい。

「生まれよ、オイ。お前、グレン＝レーダスだな？ キャレルの野郎、しくじりやがったのかよ」

「お前も同じ目に合わせてやんよー」

間合いに入ったことを確認し、グレンは固有魔術「愚者の世界」を起動。

流れるように帝国軍式格闘術で接近するグレンに対し、男……ジンは左手の指を差し向ける。

「《ズドドドドン》！——何!？」

「ライトニング・ピアス」の四連射……決まればグレンでもただじゃすまなかつただろうが、当然魔術起動の封殺が成されているこの場においては魔術式が完成したところで起動せずに溶けて消えるのみ。

『特務分室』を脱退した後も、定期的にシユバルゴに付き合っつて格闘戦をやらされたグレ

ンの拳は現役時代のものと遜色はなく。

まともに拳を食らったジンは何をすることもできず地に倒れた。

#

一方、レイクと戦闘を行うシュバルゴは、五本の浮遊剣に対して決定打を与えられず苦戦していた。

浮遊剣の構成は、三本の自動剣と二本の手动剣。

達人の技量で機械的に迫る三本と、こちらの行動の隙を狙ってくる二本……計五本の浮遊剣とレイクの放つ魔術に、シュバルゴは抑え込まれていた。

いや、それだけであればシュバルゴの実家……モータナスの剣技を解禁すれば武器破壊も可能だっただろう。

剣技を使うには未だ未熟であり、実戦で使うことは封印しているが、ルミアを守るために四の五の言ってられない。

だが、それができない理由があった。

「ち、極めつけは……」

ボーン・ゴーレム。

竜の牙を素材に錬金術で錬成されたゴーレムを、召喚【コール・ファミリア】によって使い魔として連続召喚された骸骨たち。

竜由来の素材で作られたソレらは、驚異的な膂力・運動能力・頑強さ・三属性耐性を持つ。

並の戦士・魔術師では対処ができない危険な相手がばつと見て数えきれないほどに存在していた。

繰り返すのに一拍の時間が必要な剣術でレイクを相手しながら、この数を片手間に対処することなど不可能である。

出来るとしたら、それこそセリカぐらいだろう。

むしろ、シュバルゴが得意とする暗殺戦法が使えない中で、レイクの魔術、浮遊剣、ボーン・ゴーレムのすべてをさばいて時間を稼げていることに自分でも驚くぐらいだ。

「吠えよ炎獅子！」

「つ、ぐおおおおおつー！」

最後の詠唱ストック・スベル「フォース・シールド」を使用して「ブレイズ・バースト」をやり過ぎすが、もう後がなくなつた。

魔力は残りわずか、疲労もピーク。

いよいよ命運尽きたとも思える状況だが、シュバルゴはまだ諦めていなかった。

理由は簡単。

すでに合流していてもおかしくないはずの敵、ジンが未だに来る心配がないこと。

四節詠唱による「ライトニング・ピアス」がグレンの指先から放出され、雷閃は真っ直ぐレイクに……向かうことなくあらぬ方向へと曲がっていく。

その先にあるのは先に弾き飛ばされたシュバルゴのレイピア。

雷閃によってはじけ飛んだレイピアの向かう先には、拘束から抜け出して自動剣を捌きつつゴーレムを避けながら走るシュバルゴの姿が。

「モータナス流剣術……」テストロイ「破壊」

レイピアを掴んだシュバルゴが、初めて実戦において剣技を披露した。

様々な用途に合わせて剣技を使い分けるモータナス家の剣術、その中でも最も威力が高くて多用される、モノを破壊することに特化した一閃。

モータナス家においては一番最初に習得する、単純であるがゆえに習得までに最も時間がかかるが、目に見えて稽古の効果が実感できる基礎の剣技。

その破壊力は三本あった自動剣のすべてを武器破壊してのけるほどのものだった。

「く、《目覚めよ刃——》」

「させるかよ」

予備の剣を起動させようとするレイクだが、その前にグレンが「愚者の世界」を起動し不発、魔術は使用不可。

その間にもシュバルゴはレイクに迫っており、手動剣はグレンから離せない。

これだけ近づかれれば、ボーン・ゴーレムによる攻撃は自分をも巻き込み、そうなればシユバルゴが攻撃を避けるだけでレイクは自滅する。

圧倒的に勝っていたはずの戦況が一転し、万策が尽きたといわざるを得なくなるほどにまで敗色濃厚となってしまうた。

「……俺の、負けか」

何ができることもなく、レイクはそのままシユバルゴのレイピアに貫かれる。

「ならば、最期、に……時間……かせぎ、を……」

死にゆく直前、レイクから僅かな魔力が放出された。

瞬間、動きが止まっていたボーン・ゴーレムの全てが動き出す。

ゴーレム達のターゲットは当然シユバルゴとグレンの二人。

無数にいるゴーレムに対して、満身創痍のシユバルゴと「愚者の世界」の効果が切れるまでではあるが魔術を使えないグレンでは苦戦は必至。

長期戦を覚悟する二人だったが、そこで思わぬ援軍が現れた。

「《大いなる風よ》！」

【愚者の世界】の範囲の外、教室から放たれる黒魔【ゲイル・ブロウ】の風が重いゴーレムを吹き飛ばす。

軍用魔術を教えられていない生徒が使える最も威力の高い汎用魔術であり、使用者は

「手伝います、先生！シユバルゴさん！」

システイナーナIIフィーベル。

グレンが担任を務める二年二組の中でもトップレベルに優秀な生徒であり、シユバルゴとも少なからず関係のある少女。

本来では人の死を克服するのに長い時間原作終盤辺りを必要としていたはずだが、今回はルミアの誘拐事件と一緒に巻き込まれていることから、嫌悪感を抱くものの割り切ることができぐらいには精神が成長イカれてしていた。

幼いころに事件に巻き込まれ、シユバルゴたちの配慮によって彼女らの前では人殺しは行われなかったものの、救ってくれた人たちが人殺しであることはグレンがニートになった際にある程度は聞いていた。

もちろん、最初は信じられないという気持ちと恐怖がないまぜになり、しばらくアルフオネア邸に顔を見せない期間もあったが、今ではこうしてルミアほどまでとはいかないが精神的に強くなった。

「白猫!?なんで出てきた!こいつらは俺たちだけでも——」

「ルミアが一体のゴーレムに連れていかれたんです!早く追いかけないと!!」

「何……!?!」

うかつだった。

このボーン・ゴーレムたちは一体一体がレイクの使い魔であり、命令に沿って動いている。

魔力リソース的にこの数すべてに別々の命令を出すことは不可能でも、一体だけに細かな指示を送り実行させることは可能である。

「ち、【愚者】！一気に殲滅は可能か！」

「使えば戦力外に成り下がるのと、準備してる間無防備になるのを考えなければ出来ぬ！」

グレンが懐から取り出したのは小さな結晶、魔術触媒『虚量石』^{ホローツ}。

この魔術触媒と、長い詠唱時間、そしてグレンが持つ魔力のほぼすべてを消費して放てる大技であれば、この無数に存在するゴーレムを一掃できる。

「で、あれば……時間稼ぎが必要か。だが……」

「いや、俺に考えがある。ちょうど、【愚者の世界】の効果も切れたし、白猫……システイナーナと合流できれば」

「なら、さっさと行くぞ」

二人でゴーレムをなぎ倒しつつ、最短距離で「ゲイル・ブロー」を放ち続けるシステイナーナと合流する。

「白猫！この廊下の行き止まりまで下がって「ゲイル・ブロウ」を威力低減、広範囲化、持続時間延長で即興改変しろ！節構成はなるべく三節以内だ。」

「そ、そんな！私にそんなことができるかどうか……」

「大丈夫だ」

システイーナの額に人差し指を当てて、グレンは不敵に笑う。

「お前は優秀だ。ここ最近で教えたことが頭に入っているならできる。出来なかったら単位没収な」

「そ、そんな理不尽な……。でも、分かりました。やってみます！」

決意を固めて走り出したシステイーナを見たグレンは振り返り、説得の間足止めをしていたシュバルゴに合流する。

「あとは時間を稼ぐだけだ。この数じゃ、満身創痕のお前ひとりでは足止めできる時間はそう長くないだろうからな」

「その計算は間違っていない。何より、ルミアを取り戻すための力も残しておかなければならないからな」

そして、数分の後。

改変完了の声が二人に届く。

瞬間、二人は踵を返して駆け出す。

「何節だ！」

「三節です！」

「よくやった、合図に合わせて唱え始めろ！」

逃げる二人、追うゴーレム。

ある程度システイーナに近づき、頃合いを見て――

「今だ!!」

「《拒み止めよ・嵐の壁よ・その下肢に安らぎを》——ツ！」

跳躍する二人、システイーナの傍らを通り過ぎる。

瞬間、呪文が完成。

広範囲かつ爆発的な風の壁が、ゴーレムたちの歩みを止めた。

命名するならば、黒魔改「ストーム・ウォール」か。

少しずつ気流に逆らってにじり寄るゴーレムたちを見て完全には足止めできていないことを悔やむシステイーナだったが、グレンにとっては十分すぎる時間が確保できた。

「《我は神を斬獲せし者・我は始原の祖と終を知る者》——……」

『虚量石』を握りこんだ左拳に右掌を、ぱん、と合わせ、ゆつくりと一句一句呪文を紡いでいく。

「——其は摂理の円環へと帰還せよ・五素より成りし物は五素に・象と理を紡ぐ縁は乖離すべし・いざ森羅の万象は須く此処に散滅せよ・遙かな虚無の果てに」—— ツ!!」

グレンがシステイナーの前へと躍り出た瞬間、呪文は完成した。

「ぶっ飛べ、有象無象! 黒魔改【イクステインクシオン・レイ】—— ツ!」

完成した魔法陣から巨大な光の衝撃波が放たれ、廊下のはるか向こうまですべてを呑み込んだ。

やがて光が収まると、後には何も残らなかつた。

対象を問答無用で根源素オリジンにまで分解消滅させる、セリカIIアルフォネアが邪神の眷属を屠るために編み出した神殺しの魔術……それが【イクステインクシオン・レイ】である。

「は、これで、いいかよ? いささかオーバーキルだが、俺にはこれしかねーからな……ごほっ」

「上出来だ、【愚者】」

「ここでは、そう、呼ぶなよ……。俺はもう、【愚者】じゃねえ……魔術講師の、グレン・レーダスだ……かはっ」

「先生!?!」

魔力を限界まで使用したことによって、マナ欠乏症を発症したグレンに魔石を放り投

げるシュバルゴ。

自身の魔力をためておいた即席の魔力バッテリーだ。

シュバルゴとグレンではあまり魔力の相性は良くないために効率は悪いが、それでも動ける程度までは回復できるだろう。

「あとは頼んだぜ？ルミアの護衛さんよ」

「言われるまでもない」

システイーナに介抱されながら軽口をたたくグレンに返事をし、シュバルゴはルミアを取り戻すべく動き出した。

第十二話

廊下を歩きながら、ルミアの居場所を考える。

ルミアに持たせていた居場所を知らせる魔道具は道中に落ちており、直接現在地を知ることが不可能だった。

ボーン・ゴーレムを一掃した後にグレンに聞いた話では、学院の結界の設定が変えられており、道中襲ってきた下手人の一人が持っていた使い捨ての魔道具で結界の一部を破り、中に入ることが出来たらしい。

普通に考えれば、中から外へ出るための魔道具も用意してあると見るべきだが、本当にそうだろうか？

確かに、外へ出るためには結界を通らなければならない。

しかし、結界の外にはすでに帝国魔導師団が到着しており、学院を取り囲んでいる。ルミアが王女であることを知っていて、五体満足で連れ去ることが目的であろう天の智慧研究会が、この状況を想定していないはずがない。

どれだけ凄腕の魔術師であろうと、この包囲網から抜け出すのは難しいだろう。さらに言えば、グレンはすでにこの事態をセリカに伝えているはず。

にもかかわらず未だ戻ってきていないということは、学院と魔術学会の会場を繋ぐ転送法陣が使用できない状態にあるということ。

つまり、学院の結界の設定を変更し、学院側の転送法陣をつぶした内通者が、いまだこの学院内にとどまっていることを意味する。

「で、あれば。ルミアはその内通者と一緒にいる可能性が高いか」

シユバルゴはさらに考える。

「ここまで推測することはできた。」

問題は、今現在、その内通者とルミアはどこにいるのか？

「強固なセキュリティがかけられた学院の結界の設定を変えられる凄腕の空間系魔術師の存在、使用できなくなった転移魔法陣。……【愚者】が教師として働くことになった

原因は、なんだったか」

担当教師の失踪。

それが失踪ではなく、内通者としてずっと学院に隠れてとどまっていたとしたら。

姿をくらませてから計画実行の今日まで、念入りな下準備をする期間があったことになる。

「それだけの期間があれば、転移魔法陣の転移先を変更するための準備をするのにも困らん」

つまり、今、シユバルゴが向かうべきは――

「どうやら、正解のようだ」

推理の果てにたどり着いた場所は、転送塔。

転送法陣が管理されている塔へと続く並木道に、学院内を守護するためだけに起動するはずのガーディアン・ゴーレムが無数に徘徊しているのを見とめる。

「ち、面倒だが、押し通るッ!!」

レイピアを抜いたシユバルゴがゴーレムのほうへと突き進む――。

#

「思いの外、手こずったか……」

すべてのゴーレムを処理し終え、口端を伝う血を拭いながら塔の階段を上っていく。

ここまでの疲労からゴーレムとの戦闘で判断ミスが生じ、シユバルゴの左足は使い物にならなくなっていた。

レイピアを杖代わりにしてどうにか前へと進むが、問題は外傷だけではなかった。

「ち、ここにきて、マナ欠乏症か」

ここまでの戦闘で体内のマナは酷使されており、限界を迎えていた。

この状態に対処できるように持つてきていた魔力石はグレンに与えてしまったため、魔力を回復することもできない。

だが、ここで休息を挟むわけにもいかない。

相手の空間魔術の腕前が如何ほどか分からないため、できるだけ早く救出を急がなければならぬからだ。

休息の時間をとって、向かった果てに間に合わなかったら目も当てられない。

そんなことになったら一生後悔するだろうから。

そして。

ルミアに情けない姿を見せないように、表面上だけでも余裕があるように装いつつ。

ようやく、シュバルゴは最上階の大広間——転送法陣のある部屋へとたどり着いた。

「ッ、貴方は……?」

「フン、そういえば、オレの存在は想定外だったか。ルミアを返してもらおう」

「シュバルゴさんっ!」

シュバルゴの姿を見て困惑する下手人、魔術的な拘束を受けてなお希望に満ちた表情で迎えるルミアを順に見て、ルミアのいる床に存在する転送法陣と下手人のいる床の魔

法陣が魔力路でつながっていることを確認したシュバルゴは、魔法陣を解析する。

ルミアの下の転送法陣は時限式であり、特定の時間を過ぎると自動で法陣上の存在を指定座標へと転移させるもの。

では、下手人の下の魔法陣は？

「貴様、学院もろとも自爆するつもりか」

「それが分かるということは、貴方も天の智慧研究会の関係者ですか」

「ふん、残念だが、かの研究会からオレの名は除名されているだろう」

白魔儀「サクリファイス」——換魂の儀式。

おそらく下手人の魂は魔術的に調整されており、学院が吹き飛ばほどの爆発を起こして自分も死ぬつもりなのだろう。

要人が現れた際の人間爆弾として主要施設に派遣される、第一団ポーターズ・オーダー【門】の捨て駒がいと聞いたことがあったシュバルゴは、魔法陣の正体とともに下手人がやろうとしていることまで読み切った。

「貴方は、研究会を裏切ったのですか。私には出来ないことを、平然とやってのけるのですね」

「ヒューイ、先生……」

下手人の落ち込むような言葉に、ルミアが反応する。

下手人の正体が、失踪した魔術講師ヒューイールイセンであることが確定した。

「フン、長年生徒と接して、情でも湧いたか？」

「はは、そうですね。少なくとも、悪い時間ではありませんでした」

シュバルゴはルミアの床の法陣……転送法陣に向き合い、親指の皮を噛みちぎる。

【サクリファイス】は転送法陣と連動している。

つまり、転送法陣を解除すれば【サクリファイス】も無効化される。

「《原初の力よ・我が血潮に通いて・道を為せ》」

黒魔【ブラッド・キャタライズ】を唱え、噛みちぎった親指から滴る血を魔力処理し、簡易的な魔術触媒としたシュバルゴは、解呪術式を転送法陣上へと書き込んでいく。

魔力に余裕があれば、魔力そのものを用いて文字を書くこともできたが、生憎今はマナ欠乏症を発症している。

シュバルゴの魔力が尽きるか、法陣すべてを解呪するかの勝負……法陣起動まではまだ十分な時間はあるが、一度気を失えば間に合わないだろう。

「《終えよ天鎖・静寂の基底・理の頸木は此処に開放すべし》」

黒魔儀【イレイズ】……解呪の魔術を起動し、法陣の最外郭を破壊する。

全五層のうちの一つ目の解呪が完了した。

続けて第二層に取り掛かる。

だが、ここでシュバルゴの動きが目に見えて遅くなる。

そして、とうとう――

「シュバルゴさん、顔色が……」

「ここに来るまでに魔力を使いすぎたようですね」

ここにきて、不調がルミアとヒューイにばれた。

それからはルミアが事あるごとに無理はしないでとシュバルゴに訴えかけるが、そんなこと出来る訳もなく。

「《終えよ天鎖・――》、《――静寂の基底・――》、《――理の頸木は此処に開放すべし》……！」

意識を失いそうになりながらも、ギリギリで解呪を成功させ――

「……、いっせ」

三層目へと取り掛かろうとしたシュバルゴは、とうとう限界を迎えた。

大量の血を吐き、その場に倒れこむ。

「いやああ、シュバルゴさん！」

ルミアが悲鳴を上げて、手を伸ばす。

だが、その手は拘束に阻まれて届かない。

「ぐ、……くそ、ここが、限界……だとても……う？」

体から抜けていく力、失っていく感覚、遠のいていく意識。

マナ欠乏症の状況下で魔力を酷使し続けたシュバルゴの体は限界を迎えていた。

このまま放っておけば死んでしまうだろう程に。

「いやだ、そんなの、認めない……！絶対に死なせない！もう、一人で生きていくなんてできない。シュバルゴさん無しの生活になんて戻れない！だから……！」

（実際には違うが）母親にすら捨てられて、信じられる人がいなかったルミアが唯一全幅の信頼を置く相手。

再びその相手を失うことは、ルミアには耐えられなかった。

シュバルゴがいるから頑張れる。

シュバルゴがいるなら、何も怖くない。

本来正史であれば無条件に強かったはずのルミアの精神は、依存先であるシュバルゴの存在で強弱が変わるものへと弱体化してしまった。

シュバルゴが死に、この世から去れば、ルミアは塞ぎ込んで何もしなくなるだろう。

あるいは、後を追って死ぬかもしれないほどに、ルミアの精神性は危うい状況だった。だが、しかし。

シュバルゴがまだ生きていて、現在進行形で危機に瀕している状況であれば話は別である。

「う、あああ……あああああああつっつ!!」
手を伸ばす。

魔術的な拘束を無理やり振り切るが如く、懸命に。

ルミアが王家を追放されるきっかけになった異能。

一般的に見れば感応増幅者と呼ばれる異能者であるルミアの異能は、現状では人に触れることで発動する。

その力は、触れた相手の魔力や魔術を何十倍にも増幅するもの。

マナ欠乏症である今のシュバルゴにとっては、これ以上ない薬である。

指先だけでも触れられれば、助けられる。

それだけの力が、ルミアの異能にはある。
なればこそ。

「んっ、んっ——!!」

拘束によって身体が引き裂かれそうな痛みに見舞われようが、関係ない。

シュバルゴが居なくなる方がずっと怖いし、ずっと心が痛いから。

絶対に届かせる。

ただその一点のみの激情が功を奏したのかもしれない。

ルミアの手の指先が、シュバルゴの倒れた身体を捉えた。

瞬間、ルミアの身体が発光した。

同時に、シュバルゴに魔力が補填されていく。

「……ツ！ルミア？」

「シュバルゴ、さん!!」

本来正史よりも法陣一層分離れた場所に、限界を超えて手を届かせたルミアの身体は血が出るような傷は無いものの、脱臼や筋断裂といった外傷はあるようだった。

「……待っている。すぐに解呪して治療する」

「はいー」

そこからは手早く事は運んだ。

増幅した魔力を用いて残りの三層を解呪し、ルミアを拘束から解放して応急措置を済ませ、特に抵抗しないヒューイを捕縛したシュバルゴは、痛みで気を失ったルミアを背負って三人で転送塔の階段を下っていく。

「僕は、どうすればよかったのでしょうか？組織のために死ぬか、組織に逆らって死ぬか……今でも、僕にはわからないんです」

「フン、俺がその答えを持つとも？」

「ええ、ルミアさんという個人を救うために、かの組織を裏切った貴方ならば……」

シユバルゴとヒューイの状況は、恋愛と師弟愛という感情の差はあれど、大切な人を見出した点ではある意味似ていた。

シユバルゴは衝動的にその場の想いで研究会を裏切る決断をしたが、少しでも研究会側に対する未練があれば立場は今と全く違うものになっていたかもしれない。

ヒューイについても、長年の生徒との交流で沸いた友愛の感情のままに組織に逆らう行動を起こす世界線もありえなくはなかっただろう。

二人の現在の立場を決定づけた要因は数あれど、一番は――

「未来の自分がどうありたいか」

「未来……?」

「行動を起こした先の未来の自分を思い浮かべて、どうするべきかを秤にかける。オレの場合はルミアを救った先に彼女を愛でて、彼女から好かれる自分が、研究会に残った先にある真理を得る自分よりも魅力的に思えたから裏切った」

「なりたい、自分……ですか」

「貴様にもあるんじゃないのか？講師として働いた時間を経て、なりたい……なりたかった自分が」

言外に犯罪者となった今では取り返しがつかない現実を突き付けるが、ヒューイはど

こかすつきりとした表情をしていた。

「もつと早く会いたかったですよ」

「生憎、男からの好意は受け付けていない」

「はは、これは手厳しい」

その後、ガーディアン・ゴレムとの戦闘音から場所を割り出した休息後のグレン達と合流し、ヒューイの身柄とルミアの治療を任せした後、限界を迎えたシユバルゴは倒れるように気絶した。

#

アルザーノ帝国魔術学院自爆テロ未遂事件。

非常勤講師と新米警備員の二人の活躍で収束した前代未聞のこの事件は、敵組織の大きさと社会的な不安の影響を考慮して内密に処理された。

この事件を知るものは軍や帝国の重鎮たち以外では、当事者となった生徒たちとごく一部の講師・教授陣のみである。

ルミアはしばらく休学したがすぐに復学したため、身分が疑われるような噂が出てきても一か月もすれば自然と消えていった。

なんてことのない平和な学院生活が戻ってきたのである。
そして。

(しかし、なあ。ルミアの正体がとうとう天の智慧研究会に割れてしまったか)

非常勤ではなくなり、名実共に魔術講師という職を手にしたグレンは、屋上にて一月前の事件を振り返っていた。

シュバルゴの介入によって最初からルミアがエルミアナ王女だと知っていたグレンは、これまで以上にルミアから目を離さないように通達された。

シュバルゴは引き続きシユルツとして警備員の業務を担当することとなったし、ルミアを守る包囲網が完成しつつある。

ルミアを知る一人であるシスティーナは、クラスメイトにその正体を隠すのに一役買ってくれた。

もちろんルミアが狙われた理由に関して引つかかる思いはあるだろうが、二組の生徒たちはあまり詮索しないでくれた。

(まあ、なるようになるだろ)

全ては元通り。

グレンがそう気楽に考えていたその時、背後から声が掛けられた。

「まさか、お前がこうして本当に講師になるなんてな。ちよっと前の様子からじゃあ考えられないぞ?」

「セリカか。いや、別にお前が養ってくれるなら万々歳大歓迎なんですけど?」

「はは、ふざけんよ、バカ息子」

振り返った先には機嫌良さげなセリカが佇んでいた。

「まあ、あいつらの行く先を見てみたくなっただよ。講師をやる理由としては、十分だろ?」

「ふん、システイーナの期待と不安の目に抗えなかった、の間違いでは無いか?」

「……シユバルゴ」

最もらしい理由を話すと、水を差すようにシユバルゴが現れた。

だが、シユバルゴの言葉も間違いではなく、グレンの講師継続の理由の一つではある。

非常勤の期間の終わりが近づいてから、システイーナの様子が明らかに変わっていたのである。

それもそのはず、本原作とは違ってグレンの正体をはじめから知っている上に、命の恩人として慕う相手と会う機会が減るかもしれないなかったのだ。

続けてくれるかもしれないという期待と、会えない時間が増えるかもしれないという不安の二つの感情が緋い交ぜになってもおかしくは無い。

「なまじ正体知られてる分、下手に怠けられねえんだよな……」

「別に怠けて幻滅されれば関わってやることも無くなると思うが？」

「お前……毎朝アイツに修行つけてやってるのに、気まづくなるような行動取れるわけねえだろ……」

学院襲撃事件を経て力不足を感じたシステイナが、自らグレンに稽古を頼み込んできたのだ。

システイナ的には憧れの人にマンツーマンで魔術を教えて貰えるかもしれないという打算的なものもあったのかもしれないが、ルミアを守っていく上で事情を知るシステイナの戦闘能力の向上が今後を考えれば必須ではあったことと、システイナの意思がグレンの予想以上に固かったことから二つ返事で了承したのである。

「本当に、よくこの短期間であのだらけきつた性格がここまで変わったな……。お前を変えたのが私じゃなくて、お義母さん心底悲しいよ」

「いや、お前が非常勤講師の仕事持つてきてなかったら未だにスネかじって生活してる自信あるぞ？お前が俺を変えたんだよ」

「シユバルゴは私の下から離れてくれるなよ？お前は一生私の下僕だからな！」

「ルミアと過ごせるならばオレはそれでいい。逆に、いいんだな主？貴様の家に居座り続けて」

「言うねえ、元犯罪者！」

家族団欒のような話が進む中、屋上の扉が再度開かれる。

「……居た！ やつと見つけましたよ、先生！」

「シユバルゴさんもいる……！ 良かった、急に居なくなるから……」

「ルミア、貴女……」

現れたのはシステイーナとルミア。

ルミアの束縛感の強い言葉に若干引き気味になりつつ、システイーナはグレンに今日授業で取り扱った内容についての質問を投げかけてきた。

「あー、ここじゃ説明もしにくいし、一旦教室に戻るか」

「……ルミアもオレの腕から離れる気配がないし、共に行こう」

「お前も大変だな。……いや、ルミアをこうさせたのはお前だろうから自業自得なのか？」

二人の生徒に手を引かれていく二人に、セリカは笑う。

「あつはつは、まあとにかく、お前がちやんと働いてるのを見て、私は安心したぞ」

「そうかよ。……まあ、根を詰めすぎない程度に頑張るさ」

「ふ、オレもオレの責務を全うするのみ」

その場から離れていくグレンとシユバルゴ。

その後ろ姿を見守るセリカは、柔らかく笑うと同時に――

「本当に嬉しいけど、寂しいなあ」

どこか遠い目をして、空を見上げるのだった。

魔術競技祭（二卷）

第十三話

アルザーノ帝国魔術学院、放課後の学院長室にて。

切羽詰まったような顔で学院長であるリックに詰寄るグレンの姿があった。

「あの、ほんつとくに申し訳ないんですけど、給料の前借りとかお小遣いとかって貰えたり……」

「《する訳・ねえだろ・アホか》——ッ！」

傍らで言葉を聞いていたセリカが起動させた「ライトニング・ピアス」の雷閃が、グレンの頬を掠めて通り過ぎ去っていく。

「な、何すんだ、殺す気か!？」

「ああ、死ぬよ。シユバルゴから聞いたが、ギャンブルでスったんだろ？ 救いようがねえよ、お前」

「あいつ、余計なこと告げ口しやがって……!」

怒りの矛先がシユバルゴへと向くグレンだったが、何とか飲み込んで続けて懇願する。

「お願いします、助けてください」

「とは言ってもだね、グレン君。規則で給料の先払いは出来んのだよ」

「マジっすか、困ったな……当分シロツテ生活も覚悟するか……？」

昔セリカに教わったサバイバル技術を駆使して生き延びることも選択肢として頭に入れる。

そんなグレンを見兼ねたリックが、別の方法を提示する。

「じゃが、特別賞与は出せる可能性があるぞ」

「本当ですか!?! どうすれば貰えるんですかッ!」

「来週、学院で開催される『魔術競技祭』で、君の受け持つクラスが総合的に最も優秀なクラスになれば、特別賞与が出るのじゃ」

「あー、成程。……そういや、白猫に全部押し付けた覚えがあるな?」

「まじでクズだな、お前」

魔術競技祭。

年に三回に分けて、学院主催で開催される生徒同士の魔術の技を競う祭りであり、今回は二年次生が対象となっている。

丁度金欠になったグレンにとって渡りに船なイベントだった。

「こうしちゃいらねえ、下手に出場競技を決められないように急がねば! 教えてくれ

てありがとうございましたーッ！」

二人は慌てた様子で学院長室を去っていくグレンを見送る。

「全く、あいつとききたら……」

「じゃが、グレン君のクラスは勝てるのかね？ 評判ではハーレイ君の一組が優勝すると噂されているが」

「まあ、ハーレイのクラスはやたら粒ぞろいだからな……システイーナやギイブル、ウエンデイといった成績優秀者を使い回しても恐らく勝てないだろうな。——だが」

ニヤリと笑って、セリカは言葉が続ける。

「動機は不純だが、やる気になったあいつは手強いぞ？ 久々に、面白くなりそうだ」

#

所変わって、二年次二組の教室。

システイーナとルミア主導で参加競技を決める話し合いが行われていたが、祭りに参加するとは思えないくらい生徒たちのテンションは沈んでいた。

「ねえ、せっかく先生が今回の競技祭は『お前達の好きにしろ』って言ってくれたんだし、頑張ってみない？」

「無駄だよ、ルミア。皆気後れしてるんだ。なにせ、今回は来賓として女王陛下が見に来られるんだ。恥を晒したくないって思うのは当然だと思うけど？」

「ちよつとギイブル!」

優しく論すように参加を促すルミアの言葉に対して、ギイブルが無駄だと反論する。鼻につくような物言いに憤るシステイナだったが、周りの生徒たちから否定の言葉は出てこない。

まるでお通夜みたいなどんよりとした雰囲気の中、いきなり教室のドアがピシャンと開けられた。

「よつしお前ら、競技祭のメンバー決めはこのグレン大先生様に任せなア!!」

勢いよく現れたのは担任、グレンⅡリーダーダスである。

「ちよつと、先生!?!メンバー決めは私たちの好きにしろつて言つてませんでした!?!」

「あー、すまんがそれは出来ん! 諸事情で俺が自ら、この二組が優勝するためのメンバーを選出していくからな! ルミア、今から競技名と参加生徒の名前を順に言つていくから黒板に記録してくれ」

「は、はい……」

「そんな、勝手な……」

少々落ち込むシステイナを他所に、競技名だけで未だ一人の名前も書かれていない黒板が埋まっついていく……が。

「まずは一番配点が高い『決闘戦』——これは白猫、ギイブル、カツシユの三人だな」

「え……う？」

『暗号早解き』はウエンディ一択、『飛行競争』はロッドとカイ、『精神防衛』は……ルミアが適任だな」

成績優秀者を使い回しするものだと思っていた生徒たちの予想と反して、生徒全員に何かしらの競技に参加させる選抜方法だった。

当然、自分がその競技に選ばれた理由を質問されるグレンだったが、その全てに納得のいく答えを返した。

そんなグレンの姿を見て、目を輝かせるシステイーナ。

「——他に質問は？」

「先生、本当にそれで勝てると思ってるんですか？優勝を目指すなら、成績優秀者で全種目を固めるのが定石でしょう!! 毎年の恒例で、他の全クラスがやっていることじゃないですか!!」

「あー、それなんだがな」

原作正史とは違い、それなりに真面目に講師という職と向き合っているグレンは、全競技を優秀者で固める風潮があることを予め知っていた。

それでもなお、優勝を目指すにはクラス全員で参加した方が勝率が高いと断じたのだ。

「確かに、優秀な生徒を使い回しするのは勝つために有効な策の一つだ。だからこそ、白猫やウエンデイ、お前も複数の種目には出てもらおう」

事実、クラス全員に何かしらの種目が行き渡ったあと、残った種目についてはグレンとて優秀者を優先的に配置させている。

「だが、それもやり過ぎると命取りなんだよ。競技祭当日までの時間は限られてる。そんな限られた時間の中、どれだけ優秀な生徒でも全部の競技の練習なんざ出来るわけがねえ」

グレンが生徒の競技の練習に付き合う上での一番ネックになるのが時間だ。

他の講師よりも魔術理論をより噛み砕いた教え方をするグレンの授業は、分かりやすく役に立つ一方で時間がかかりすぎる。

一つのテーマについて授業するだけでも一時限分の時間では足りない事もざらにある。

そんなグレンが生徒の競技練習を監督する場合、優秀者で固めてしまうと一つ一つの競技の練習が中途半端になる。

そんな状態でハーレイの一组に勝てるはずもない。

「それに、当日の魔力配分も問題だ。全競技を成績優秀者で固めた場合、必然的に魔力を温存させながら競技を行う必要がある。まあ、終盤の種目でガス欠しちまったら元も子

もねえから当然だが。……が、魔力を温存させながら競技に望んで、絶対に勝てるという言葉切れるか？」

対して、クラス全員で競技に望む場合、競技での魔力温存を考える必要が無くなって全力が出せる。

結果、生徒一人一人のパフォーマンスも上がる。

「全員の得手不得手を考えて編成したつもりだ。各競技の練習メニューもこれから考えるが、取り組めば勝率は必ず上がる。あとはなりふり構わず全力で自分の競技を楽しめば優勝を十分狙える筈だ。ここまで聞いて、他に反論があるやつは？」

これ以上の反論はなかった。

かわりに、生徒たち全員、やる気に満ちた目をしていた。

「よし、具体的な練習メニューは練習期間が始まってからだ。今週は基礎的な部分を確認しておけよ？」

『はーい！』

二年次二組の全員の心が、この時一つとなった。

#

翌週の放課後。

競技祭前の一週間は練習期間となり、四時限目の授業が無くなって三限以降の時間は

魔術の練習をしてもいいこととなっている。

教室にて、メンバー決めの日からグレンが考えてきた練習メニューを渡された生徒たちは、学院の中庭でそれぞれメニューを熟していた。

グレンは自分の持つ知識の全てを使って一人一人の練習メニューを作成した。

いざとなればシロツテの枝などの草木で次の給料日ぐらいまでなら凌げるとはいえ、美味しい飯にありつけるか否かが掛かっているのであれば寝る間も惜しんで作業が出来た。

練習の中で出てきた生徒の疑問に答えながら、一人一人の様子を確認する。

練習が順調に進む中、急に怒鳴り声が聞こえてきた。

「さっきから、勝手なことばかり……いい加減にしろよ！」

怒声の先では、カツシュを筆頭にした二組の生徒の一部と、ハーレイが担任している一組の生徒たちが揉めていた。

「おいおい、どうしたよ？」

「あ、先生！こいつら、後から来たくせに勝手なことばかり言つて——」

「うるさい！この中庭は今から俺たちが練習に使うんだから、お前ら二組はどっか行けよ！」

「なんだと!!」

「あー、ハイハイ、喧嘩すんな?」

口喧嘩が殴り合いにヒートアップする前に、グレンが間に入って二人の首根っこを掴む。

二人が多少の痛みで悶える中で大人しくなったことを確認して手を離す。

「一組も今から練習か?」

「あ、はい……えつと……ハーレイ先生の指示で場所を……」

「……まあ、確かにうちが場所を取りすぎてるのは否定できねえな。全体的にもうちよつと端に寄せるから、それで手打ちにしてくんね?」

「ば、場所を空けてくれるならそれで……」

と、この騒動が丸く収まりそうになつたところで――

「クライス、何をしている!場所はまだ空かないのか!」

「ああ、ユーレイ先輩じゃないっすか」

「ハーレイだ!ハーレイ!グレン!レーダス、貴様、私の名前覚える気、全つ然無いだらう!」

一組の担任、ハーレイ!アストレイが現れた。

「ふん、まあいい。……いや、良くは無いが。取り敢えず貴様、聞いたぞ?クラス全員、何らかの種目に出すらしいな?」

「ああ、はい。その予定っすけど」

「ハッ、戦う前から勝負を捨てたか？たとえシステイナーナールフィーベルを使い回したとしても、優勝は私のクラスがいただく気だったが……貴様はそのスタートラインにすら立っていない」

グレンが非常勤講師として学院に來た時から、何かと突つかかかって來るのがこのハーレイである。

グレンとしては名前を間違えるぐらいで何故こうも敵視されているのかが分からないうが、優勝を狙って全員を起用したことをこうも悪く言われると少し頭にくる。

「使えない足手まとい共を使うほどに勝つ気がないクラスが、優勝を目指す我々を差し置いて場所を占有するなど迷惑千万だ！分かったらとつとと失せろ！」

ハーレイの言葉は、成績が悪かった昔のグレンに対する同級生の言葉と重なり、空気が重くなる二組の面々の姿はどうにも過去の自分と重なった。

頭の血管が、プツンと切れた気がした。

「お言葉ですがね、これは優勝する為に俺自らが編成したんすよ。勝負を捨てた？勝つ気がない？全くの逆っすわ。俺は勝負を捨てた覚えは無いし、勝つ気しかない。優勝をいただくのは先輩のクラスじゃなくて俺のクラスだ」

「き、貴様……！」

「この布陣の強さが理解できないってんなら、それは重畳。誰が主力だとか足手まといだとか、関係ない。俺たちは全員で勝ちに行く」

「そ、そんなこと、口ではいくらでも言えることだ!!」

言うは易し、行方は難し。

確かにそうだ、グレンとて絶対に優勝できるだなんて思っていない。

優勝出来る可能性が上がる編成をしただけであって、確実に勝てるとは言いきれない。

だが逆に、これで優勝できないとも思わない。

だからこそ、グレンは博打をする。

下手をすれば、食的な意味で生きていくことが難しくなるとしても。

後で後悔するとしても、この時のグレンはキレていて止まれなかった。

「給料三ヶ月分だ」

「何……?」

「俺たち二組が優勝する、に給料三ヶ月分賭ける」

「しよ、正気か、貴様……!?!」

驚愕しているのはハーレイだけじゃない。

二組の生徒たちもだった。

「さて、どうします？この賭け、乗ります？三ヶ月分って大きいですよねえ？研究がしばらく滞るくらいには」

「ぐ、ぬぬ」

当然、ハーレイは三ヶ月分の給料を失うようなリスクは避けたい。

だが、ここまでグレンをバカにして、かつ自身の生徒たちが見ている手前、退くに退けなかった。

「……いいだろう。私も、私のクラスが優勝する、に給料三ヶ月分だ!!」

苦虫を噛み潰したような表情でそう宣言するハーレイに、不敵な笑みを見せるグレン。

「ふっふっふ、流石先輩、いい度胸ですね」

「くっ、この私に楯突いたこと、必ず後悔させてやるぞ……ッ！」

忌々しそうに肩を怒らせて去っていくハーレイとその後ろを着いていく一組の生徒たちを見送る。

二組の生徒たちは、グレンの信頼に応えるかのように一心不乱に練習メニューに取り組み始めた。

そうして、魔術競技祭当日となった。

第十四話

一筋の光すらない、真つ暗闇の中で、幼いルミアは泣いていた。

同時に、胡乱な意識の中でこれが夢だと漠然と確信する。

シユバルゴと過ごすようになってから、しばらくして見なくなった悪夢。

この夢を見るのは、とても久々だった。

「ひつく……うう……。お母さん、いやだよ……。わたし、いい子にするから……。捨てないで……」

ルミア……エルミアナにとって、知る中での唯一の肉親。

幼い頃のルミアにとって、母親のアリシアはルミアの世界の全てだった。

アリシアに捨てられたエルミアナは、世界の全てから取り残されたように感じていた。

深い絶望の中でただ泣き続ける最中で……。ふと、頭に何かが乗せられる。

恐る恐る目を開くと、一筋も光なんてなかった、一縷も希望なんて無かったはずの世界が開けていて。

「あ……」

優しい笑みでエルミアナを撫でる男の姿。

初対面は最悪だったが、今となつてはルミアが最も信頼する人物であり、最大の味方。
「……シユバルゴ、さん」

——いつもなら、悪夢が吉夢へと変化したこの段階で、目が覚めていたはずだった。

だが、どうしてか、今回は違った。

ルミアを撫でていた暖かい手が離れ、シユバルゴは背を向けてルミアから遠のいていく。

「……え？ま、ま……」

静止を呼びかけても、遠のくシユバルゴは止まらない。

立ち上がって追いかけても、追いつく気配すらない。

「いや……置いていかないで……！捨てないでえ……っ!!」

そうして、シユバルゴの姿は見えなくなつて——

「いやああああああ!!」

「る、ルミア!?大丈夫!」

悲鳴をあげてベッドから飛び起きるルミアを見て、同室で競技祭の支度をしていたシ

ステイーナが驚きつつ声をかける。

涙を拭って辺りを見渡し、システイーナの姿を認めて冷静になったルミアは、自身を落ち着ける。

「はあ、はあ……ゆ、夢……？」

「その様子だと、よつぼどの悪夢を見たのね……」

フィーベル家の寝室。

昨日、翌日に迫る競技祭の復習をしようとシステイーナの家泊りに来たことを思い出したルミアは、ほっと一息つく。

慣れない環境での睡眠で、シユバルゴもここにはいないことからあんな悪夢を見たのだろうかと自分を納得させた。

「競技祭当日だけど、大丈夫なの？体調が優れないようだったら、誰か他の人に種目を代わってもらおう？」

「ううん、大丈夫。心配してくれてありがとう、システイ。でも、体調は全然悪くないから」

「そう？それならいいけど……」

そう、あれはただの夢なのだ。

シユバルゴがルミアを置いて、どこかへ消えてしまうなんてこと……するはずがないの

だから。

#

「女王陛下の御成りいっつー!」

魔術学院正門前にて、女王陛下の歓待が行われていた。

もちろん学院中の教授陣や生徒たち、シュバルゴも参加して歓声をあげている。

「……………」

「辛いかな?」

「いえ……………。なんでも、ないです」

無意識に母との唯一の思い出の品であるロケットを手握るルミアを見てシュバルゴが気にかかる。

どう見てもなんでもないわけがなかったが、家族から虐待を受けて恨んでいたシュバルゴには家族が恋しい気持ちは分からない。

頭を撫でてやることくらいしか、シュバルゴにできることは無かった。

魔術競技場にて開催式が粛々と進み、最後には女王陛下の激励を以て魔術競技祭が開
始された。

初っ端の種目は『飛行競争』。

練習期間中はスピードを伸ばすことをさせず、ずっとペース配分だけを練習させていたロッドとカイは、ペース配分をミスして減速した他クラスの生徒を抜いて三位という順位を勝ち取った。

「あつはっはっはっは！」

そんな競技の様子を見て大爆笑するのは、女王の貴賓席に同席するセリカである。

場所が場所なら即座に斬って捨てられてもおかしくない暴挙だが、そんなセリカを見てアリシアも微笑んでいた。

「はしたないぞ、セリカ君。陛下の前でそんな風に笑うのは不敬ではないかね？」

「ああ、いや、すまんすまん。悪かったな、陛下。許してくれ」

たしなめるリックだったが、なおもタメ口で話すセリカに頭を抱える。

女王の背後に控える侍女長や王室親衛隊の面々の視線が怖すぎる。

リックの前途は多難だった。

「いえ、むしろ、他の皆さんも今回は堅苦しいことなく、セリカのように話してくれてもいいんですよ？その為に、今回は賓客歓待礼式を国賓式ではなく、貴賓式にしたのですから」

「そ、そんな、恐れ多い……むう……」

困ったように呻くリック。

「楽しそうですね、セリカ？」

「楽しいよ、アリス。他のクラスは勝てばいいのだと言わんばかりに成績優秀者で固めてるし、ほんとに、何の為の祭りなのか、もう少し考えろというんだ」

アリシアからの間に、セリカはアリシアの幼少期の愛称で呼んで返す。

「しかし、グレンという講師の方の戦術眼も凄いですね？」

「ああ、あいつも成長したからなあ。主にうちの小間使いに揉まれて。まあ、全体の戦術眼というよりか、人が出来るだけの力量を見極めるのが上手くなっただけだと言った方がいいかもしれないが」

システイーナは優秀だが、使い回しても途中で魔力が尽きる。

それは他の成績優秀者であっても同じであり、それを見抜いたからこそグレンはクラス全員を起用した。

この後に競技が残っているため力をセーブする成績優秀者と、全力で競技に臨む成績下位者であれば、勝負は成り立つ。

あとは他クラスの戦術に合わせて作戦を考えてやれば、自然と優勝が目指せるというわけだ。

「考えれば誰にだって出来ることをやってるだけだよ、あいつは。まあ、他の講師たちは考えることすら放棄してる時点であいつには及ばないってことさー！」

「ふふ、本当に、元氣そうでなによりです。最後に会った時は、見ていられないほどに痛々しかったですから」

グレンが執行官だった頃にアリシアは何度か会っている。

その時のグレンの様子と今の様子とは比べ物にならないほど明るい表情をしている。

……少々寝れているように見えるのは気のせいだと思いたい。

それからも、グレンのクラスの快進撃は止まらなかった。

午前の部最後の競技を残して、二組の順位は三位という番狂わせの様相となっている。

そして次が、午前の部最後の種目。

ルミアが参加する、『精神防衛』である。

「先生、本当にルミアでいいんですか……?」

「なんだ? 何か心配事でもあるのか?」

「あの子が精神的に強いのは知ってますけど、今朝、悪夢にうなされて起きたみたいで

……ちよつと心配なんです」

「ふむ……じゃあ、ダメ押しで勇気づけといた方がいいのかもな。つてな訳で、おい、

シユルツ！」

偽の名前でシユバルゴを呼び出したグレンは、しばらく耳打ちする。

その後、額に手を当てながらシユバルゴは観客席から離れていった。

「……あの、何をするつもりですか？」

「なぐに、絶対に悪いようにはならねえさ」

グレンに頼み事をされたシユバルゴは、選手待機用のテントへと向かっていた。

他クラスの生徒と共に次の種目のために待機しているルミアを見つけたシユバルゴは、同じくシユバルゴに気づいたルミアに向けて手招きをする。

「シユバルゴさん、どうかしたんですか？」

「いや、何。これから競技だと聞いてな。激励でもしようかと」

「そうなんですな！」

ニコニコと微笑むルミアだったが、シユバルゴにはどこかその笑みが無理をしているように見えた。

「本当に、大丈夫か？」

「もう、心配しすぎですよ。期待に応えられるように、頑張ってくださいませね？」

そう言って、その場を後にしようとしたルミアを、シユバルゴが背後から抱き締めた。

「……観客席で見ているぞ。一位になったら、何でもひとつ言うことを聞いてやる」

「ほ、本当ですか!？」

「あ、ああ」

グレンに耳打ちされたセリフをそのまま言うと、ルミアは食い気味にシュバルゴに詰め寄ってきた。

さつきまで元気がなさそうに見えたのが、まるで嘘のようだった。

「絶対に勝ちます……！見ていて下さいね？」

「……ああ、頑張ってください」

そうしてルミアは待機所へと戻っていく。

この後の『精神防御』にて、一位候補だった五組のジャイルにも余裕で勝利するとう結果を残したルミアは、観客席にいるシュバルゴを見つけて、満開の笑みを浮かべた。いつも通りの可愛い笑み……そのはずなのに、シュバルゴは何故か背筋が凍るような気配を感じた気がした。

#

「安心したか、アリス？」

「はい……。あの子が、良き師、良き友人たちに恵まれて、あんなふうには笑う姿がこの目で見られるなんて……本当に、良かった」

「つたく、そこまで母親としてあの子を愛しているのなら、どうして最初から私に声をかけてくれなかつたんだ。言ってくれば、私がどうにでもしてやったのに」

「無茶を言つてはいけないよ、セリカ君。陛下には陛下の事情があつたのだから」

成長したルミアの姿を見て安堵するアリシアに、チクリと呟くセリカ。

リックがその対して窘めるように口を挟む。

「アリスを責めてるわけじゃないさ。実際、あの子を守るために相当な無茶をしたそうじゃないか？ 王女を病死したようにみせかけるためにもすごい裏工作もしたようだし。にも関わらず、王都から逃がす直前に襲撃があつて、お前も気が気じゃなかつただろ？」

「ええ、セリカが保護をしたと連絡が来た時は、本当に安心しました。改めて、ありがとうございました、セリカ」

「私らの仲だろ、気にすんなって」

二人は微笑みながら拳を合わせる。

二人の仲の良さがどれだけなのか、見ればわかる光景だった。

「でも、本当に……安心しました。これ以降、二度とあの子に会えなかつたとしても、もう私には十分です」

「本当にそれでいいのか？ あの子と、直接会つて話さなくて、本当にお前は満足なのか、

アリス？」

「それは……でも、そんなの、無理なこと……」

「私を誰だと思ってるんだ。王室親衛隊の連中をだまくらかして、あの子と話をする時間を作るくらい、余裕でできる」

可能。

だからこそ、セリカは提案する。

「アリス、どうするんだ？お前は、娘に会いたいのか？会いたくないのか？」

「私は……」

「今日、この時くらい、正直になってはいかがでしょうか、陛下？」

「エレノアまで……。そう、ですね。それなら、お願いしてもいいでしょうか、セリカ」

「ふっ、お易い御用だ、陛下」

リックはそんな密談を聞いて苦笑をこぼすのだった。

第十五話

祭りで賑わう魔術競技場の中で、一際異彩を放つ二人組が居た。

帝国宮廷魔導師団、特務分室に所属する男女……アルベルトⅡフレイザーとリエルⅡレイフオードである。

二人は気配遮断の魔術を使用しており、魔術戦用のローブなどその場にそぐわない格好をしているのにもかかわらず、競技場内の人々には気にされていない。

そんな二人が見据える方向には、着実に自身のクラスが優勝に近づいていることに笑みを浮かべるグレンの姿。

「……グレン？」

「……ああ、そうだな。俺たちの前から姿を消したと思ったら、こんなところにいたとはな」

グレンの元同僚。

【女帝】セラの殉職をきっかけに、何も言わずに特務分室を脱退していったグレンの元気な姿を見てなんととも言えない表情を浮かべるアルベルトと、無表情のまま剣を錬成するリエル。

「待て、リエル。何処へ行く気だ？」

「痛い……グレンと決着をつけに行く」

「駄目だ、俺達は任務でここにいることを忘れたか？」

「……むう。アルベルトはグレンに会いたくないの？」

リエルの疑問を鼻で笑ったアルベルトは、尚もグレンの下へと進もうとするリエルの後ろ髪を引つ張りながら反対方向へと歩いていく。

「見てわかるだろう？ 奴にはあの場所が——」

「待って、アルベルト。グレンの隣に居るやつって……」

「……何？」

歩みを止めたアルベルトが振り返り、リエルの言葉通りグレンの隣に居る人物を見ると。

「シユバルゴ……モータナス、だと？」

天の智慧研究会、第二団【地位】に属する魔術師の存在。

顔を隠すことも無く、堂々と競技祭を観戦する外道魔術師がそこに居た。

否、王室親衛隊を密かに監視するために気を張っていたアルベルトが堂々と居座るシユバルゴを見落とすはずがない。

シユバルゴは気配関係の魔術においては第一級の実力を持つ。

それ関係の魔術を使用して、アルベルトの目を欺いていたのだろう。

「ここに出てくるか、天の智慧研究会」

今の所、シュバルゴが動く気配は無い。

というか、グレンもシュバルゴの正体は分かっているはずだが、何事もないように親しげに話してすらいる。

となれば、グレンは特務分室を去った訳ではなく、シュバルゴをマークするために潜入調査をしている……？

「アルベルト？」

「……ッ、今は放っておこう。俺たちの任務は王室親衛隊の調査だ。シュバルゴもモータナスについてはグレンに任せておけば大丈夫だろう」

「……ん。分かった。じゃあ、私はグレンと決着を……」

「ダメだと言っただろう」

結局、アルベルトはリエルを引きずってその場を後にした。

補足しておく、これがアルベルトの深読みであることは言うまでもなく。

シュバルゴは外から見て存在を気付かれにくい程度に薄くする隠蔽魔術を使用していたが、グレンを注視するリエルに見つかってしまったことでこのような誤解が起きてしまった。

それがどのような結果を起こすのか……その答えはすぐに現れることになる。

#

競技祭も午前の部が終了し、昼休憩の時間となった。

午前の部が終わったすぐ後、目を輝かせながらシユバルゴの手を引くルミアに連れられてやってきたのは競技場の外、庭園のような場所。

「どうした、ルミア？ 昼食はいいの？」

「えつと……シユバルゴさん。一緒に、食べませんか……？」

「ツッはア!？」

上目遣い＋涙目（グレンの入れ知恵）で、作ってきたらしい弁当を見せてくるルミアのお願いを聞いて、シユバルゴの心は撃ち抜かれた。

血を吐いて倒れ伏すシユバルゴを見てオロオロするルミアと、その様子すら可愛くてさらに吐血するシユバルゴ。

二人が無事昼食にありつけたのは十数分後だった。

なお、原因を作ったグレンは原作通りリンに白魔〔セルフ・イリュージョン〕の講義をし、シユバルゴとルミアを見送った後にグレンを探してやって来たシステイーナが作って持ってきたサンドイッチという久方振りのまともな食事にありつけたことはここに記しておく。

ちなみに、涙を流しながら壊れたかのように「美味い」と連呼して食べ進めるグレンを見て、システイーナは若干引きつつも満面の笑みでそれを見守った。

そして、シュバルゴ達が昼食を食べ終えた頃。

「あの……少し、よろしいですか？」

「うん……？なんだ、ご婦人。道にでもまよ——貴女は……!？」

女性に声をかけられた方を見ると、シュバルゴは思わず驚愕する。

「アリシア、女王陛下」

アルザーノ帝国女王、アリシア七世がそこにいたから。

「ふふ、貴方がシュバルゴさんですね？セリカから話は聞いています。エルミアナに一目惚れして、かの組織を裏切ったと。あの子の親代わりとして支えていただいたことも、本当に感謝しています」

「貴女程の方が、そう易々と頭を下げるべきでは無い。ましてや、オレは元犯罪者。主から隠蔽魔術をかけられてはいるようだが、こんな所を誰かに見られたらマズイだろう」
「いいんです。私個人としてはとても感謝してはいるのですが、未だに貴方の手配書は有効のままで迷惑をかけていますし……今日の私は帝国女王アリシア七世ではなく、ただの一市民のアリシアですから」

いつもは傲岸不遜なシュバルゴですら、多少は言葉を選んでいる。

帝国における最高権力者であることは勿論だが、想い人の母親に相對して緊張しないわけがなかった。

「それで、要件は——やはり、ルミアか」

「ええ……お久しぶりですね、エルミアナ」

その名を呼ばれた瞬間、アリシアが現れてからシュバルゴの背に隠れていたルミアがビクツと反応する。

ルミアはアリシアの首元を確認し、そこに収まるのが金細工のネックレスであることに気づいて目を伏せる。

「しばらく見ないうちに、こんなに大きくなって……。先程の競技もお見事でした。白魔「マインド・ブラスト」を、あんなに危なげなく精神防御できるなんて……。もう白魔術の腕は私以上かも知れませんね？」

「……………あ……………そ、その……………」

嬉しそうにルミアに話しかけるアリシアだが、対するルミアはシュバルゴの影から出てくることはなく、言葉もまともに発せていない。

「こうしてまた、貴女と言葉を交わすことが出来るなんて……。本当に、夢みたい……………」

アリシアが感極まって、ルミアに触れようと手を伸ばす——が。

「——お言葉ですが、陛下」

そこでようやく硬直から脱したルミアが、片膝をついて平伏した。

そして次に、自分はエルミアアナではなくルミアであり、アリシアが人違いをしていると進言し、その言葉でアリシアの手は凍りついたかのように止まった。

残念そうに、心底悲しそうに手を下ろすアリシア。

「そう、ですね。エルミアアナは三年前……流行病で亡くなったのでしたね」
場を、沈黙が支配する。

ここまで重苦しい雰囲気になってしまつては、流石のシュバルゴも何も言えなかつた。

そうしてしばらくして。

「そろそろ、時間ですね」

未練を振り切るように、アリシアはシュバルゴに向き直る。

「シュバルゴさん。エル——……ルミアを、よろしくお願いしますね？」

「……勿論、言われるまでもない」

何とも言えない表情でシュバルゴが見送る中、アリシアは静かに去つていった。

そしてこの後、アリシアは自身の護衛であるはずの親衛隊に拘束されることとなる。

さらに、その場面を観察している者が居た。

「……信じられんな」

「どうしたの、アルベルト？遠見の魔術で、何か見たの？」

アルベルトとリエルは、建物の屋上に立っていた。

「王室親衛隊が、動いた。女王陛下を本格的に自分らの監視下に置いた」

「そう」

それを聞いたリエルが早速、迷わず歩き始める。

そんなリエルの後ろ髪を引っ張って足を止めさせるアルベルト。

「待て、何処へ行く気だ」

「決まってる。敵は全員、斬る」

「相手が多すぎる。加えて、シュバルゴモータナスの存在も忘れてはならない。女王

陛下と先程何やら話していたようだが、油断は出来ん」

「敵の戦力が上だと言うなら、こちらがそれを上回ればいいだけ」

「援軍でも呼ぶ気か？」

「ううん、気合い」

「……………」

アルベルトは険しい表情を崩すことなく押黙る。

二人の間に沈黙が訪れた。

「……最も女王陛下に忠義の厚い親衛隊が、陛下に直接的な危害を加えるとは思えん。俺達はこの行動に潜む何かしらの意図を探り、事態の収拾を図るべきだ」

「そう。私にはよく分からないけど」

「だろうな」

再びの沈黙。

外から見れば異様な光景だが、この二人にとってはいつものことだった。

#

午後の部が始まり、競技場内にルミアがいないことに気づいたシュバルゴが探しに出ると、学園敷地の南西端、等間隔に植えられた木々の陰でもたれかかっているルミアを見つけた。

「随分と探したぞ」

「……シュバルゴ、さん」

ルミアの手には、何の写真も入っていないロケットがあった。

「中身は、無くしたか？」

「……はい。いつの間にか、無くなっちゃってました」

「……」

いつ、失ったのか。

それすら分からない以上、大切だったはずの写真はもう見つからないだろう。

沈黙するシユバルゴの前で、ルミアはロケットを閉じて服の下へと落とし込む。

「私は、どうするべきだったんでしょうか？」

その言葉は、ついさっきアリシアに会った時のことか、アリシアに捨てられてからこれまでの人生のことか。

或いはその両方か。

「陛下が私を捨てたのは、王室……国の為に必要なことだったからだって、頭では理解はしてるんです。でも、私は……心の中では陛下を許せなかった……」

「まあ、それはそうだろうな」

「それでも、私はある人をもう一度母と呼びたい……抱きしめてもらいたいっていう思いもあるんです」

「……ああ」

「ふたつの感情が絡まって、どうしたらいいか分からなくなってしまったんです」
相反する感情。

どちらかの感情を割り切って即座に行動に移せる人であれば、このように悩む必要などない。

だが、そのような人物は少数であり、どちらの感情も切り捨てられずに迷うことがほとんどだろう。

シュバルゴもまた、迷いの多い人生を送ってきた。

「少し、オレの話でも聞いてもらおうか」

「え……？」

「参考になるかどうか、と聞かれたらならないだろうが、反面教師という意味ではオレの人生経験も役立つだろう」

そうしてシュバルゴは話し始める。

帝国有数の剣術一家の長男として生まれたシュバルゴは、これまでのモータナス家の活躍から当然のように将来王室親衛隊の実力者になることを期待されていた。

当時のシュバルゴもそのつもりで鍛錬していたし、そんなシュバルゴを家族もこぞつて応援した。

雲行きが怪しくなってきたのは、鍛錬を始めて三年後辺りの事だった。

剣の実力が一向に伸びない。

いや、伸びてはいるのだが、上達速度が遅すぎた。

後から鍛錬し始めた弟や妹にすら手も足も出ず敗北するシュバルゴに、家族の態度は

だんだん冷たくなっていった。

そうして、決定的な出来事が起きる。

同年代の一般兵士……警邏兵との決闘。

それなりの訓練をして、それなりの実力を持つ相手との決闘に、シュバルゴは完膚なきまでに叩きのめされた。

その日から両親から侮蔑の目で見られ始め、弟からは使い勝手の良い奴隷のような扱いをされるようになった。

唯一、妹だけは何もしてこなかったが、シュバルゴを助けることも無かった。

虐げられる毎日。

だが、シュバルゴはその現状を変える努力はしなかった。

剣の鍛錬は続けた。

いつか、自分の役に立つ事を信じて。

教養も自力で身につけた。

自立した時に、恥ずかしくないように。

自分を変える努力はしても、家族に対して何かを求めることは……終ぞ無かった。

「オレは親族と対話をしようと思わず、和解の道を自ら拒絶していた。魔術の道を歩んだ

のは、たまたま出会った二流魔術師に才能があると言われて学んだに過ぎない」

魔術師として一流になった後にも……何か一つ、自信が持てる武器を手に入れてからでも、対話の道を模索していれば、今とは何かが変わっていたかもしれない。

与えられた虐待に対して憎しみを持ち、家族を皆殺しにしたシュバルゴはどうしようもない犯罪者で間違いないのだ。

「オレのような血に汚れた男で良ければ、付き添いでも何でもしてやろう。だからルミア。お前はオレのように話す前から諦めるな。一度でもいいから、心の蟠りが消えるまで話して……それから、どうするのかを決めればいい」

「シュバルゴ、さん……」

シュバルゴの境遇を聞いてか、それとも別の理由か。

悲しそうな、それでいて何かを決心したかのような力強い目でシュバルゴと目を合わせるルミア。

「……よし。それでは、競技場に戻るぞ。システイーナやグレン……クラス全員が待っている」

「……はー」

そうして、皆のもとへと戻ろうと歩き出して。

その歩みは、すぐに止められた。

道を阻むは王室親衛隊の騎士達。

訝しみながら無視して通り過ぎようとしたシュバルゴたちだったが、ルミアの腕が騎士の一人に掴まれた。

「ルミア…ティンジェルだな？」

「……え？」

「ルミア…ティンジェルに相違ないな？」

「は、はい……そうですけど……」

そして明かされる、ルミアの罪状——女王陛下の暗殺の企て。

女王陛下の命の下、即刻死刑という重すぎる刑罰。

「なんの真似だ、王室親衛隊……！」

「なんだ貴様は。その服装……学院の警備員か？」

剣を抜き突きつけてくる騎士たちからルミアを守るように、シュバルゴが前に立つ。

「警備員ごときが、女王陛下の忠実なる臣たる我々に齒向かう気か？」

「戯言を。ルミアが暗殺を企てたという証拠を見せろ」

「そのようなことをする義理はないな。部外者には関係の無い事だ」

「何だと……？」

一 觸即発。

ものすごい表情で騎士を睨めつけるシュバルゴに、しかし騎士は動じない。

「これ以上我々の邪魔をするならば、ルミアIIティンジェルに加担する者として貴様も刑に処することになるぞ?」

「臨むと……」

「待つてください!」

啖呵を切ろうとしたシュバルゴを制したのは、ルミアだった。

「仰せの通りに致します。ですから、この人は……」

「ルミア……!?!」

「……物分りがいいな。罪人と言えど、我々に人をいたぶる趣味は無い。痛みも一瞬で終わらせてやろう」

このままではシュバルゴまで巻き込んでしまう。

その思いから、ルミアは潔く刑に服すことを選んだ。

だが、それをシュバルゴが黙って見過ごす訳もなく。

「……………バレたら居場所を失うが……仕方ない」

「…………?」

シュバルゴが抵抗しないように剣を突きつけているのが一人。

ルミアの死刑を執行しようとしているのが一人。

周囲を警戒しているのが三人。

計五人の騎士が敵。

さらに五人全員、鎧に対魔術の処理がされており、基本三属性の魔術はほぼ無効化されるだろう。

ならば、対抗策は一つ。

「モータナス流剣術……」

デストロイ
「破壊」

魔術で隠し持っていた細剣で突きつけてきていた騎士の剣を砕き、そのまま流れるように剣の腹で鎧ごとその騎士を薙ぎ払う。

詠唱ストツク済みしておいた「ウエボン・エンチャント」を剣に付与していたおかげで、剣の腹で殴っただけだが鎧越しでも気絶する程度の威力はあった。

「ッ、貴様!？」

「邪魔だ……!モータナス流剣術、【流水】」

まるで、流れる水のように。

スイスイと三人の騎士をかわしながら、流し斬る。

「ルミアはやらせん」

「貴様、まさか……!」
【墮ちた剣】、シユバルゴ||モータナスか!？」

「驚く暇があるとはな」

「つぐあぁ」

隙を晒すルミアの前に立つ騎士を倒したシュバルゴは、ルミアを抱えて走り出す。

「どうして、」

「オレがお前を見捨てるわけが無いだろう。たとえ、全世界を敵に回したとしても、オレはルミアの味方だ」

「こうして。」

天の智慧研究会としての自分をさらけ出したシュバルゴは、ルミアと共に追われる身となった。

第十六話

学院の敷地内から出て、フェジテの街中……裏路地を逃げ回る。

黒魔「グラビティ・コントロール」や、黒魔「クイック・イグニッション」などの魔術を使用しての逃走で、どうにか追っ手を振り切って身を隠す。

「チィ……ッ！存外手が回るのが早い。親衛隊総出で搜索されている現状では、できることも限られるな」

シユバルゴは半割れの宝石を二つ取り出す。

「それは……」

「遠隔通信の魔導器だ。一つは主、もう一つはグレンにつながる。……今の現状、連絡すべきは主の方か」

キイン、という音とともに、セリカに繋がる魔導器が起動する。
呼び出しからすぐに繋がった。

『……シユバルゴか』

「ああ、主。オレは今——」

『分かっている。だが、私は何も出来ないし、何も話せない』

「……何？」

シユバルゴが現状を話そうとするも、それをさえぎったセリカはシユバルゴ達の現状を知っていると云った上で助言は無いと言い始めた。

流石に困惑して一瞬思考が止まるシユバルゴ。

「どういうことだ、主」

『どうも何も。もう一度言うぞ。私は、何も出来ないし、何も話せないんだ』

出来ない、話せない。

”しない、話さない”とは言わないところから何かしらの事情があると推測するが、だからといってこのままでは、解決策もなしにひたすら逃げ続けるのみになってしまう。

無論、最悪は自身の力の全てを使って逃亡生活を熟してみせるつもりだが、国を相手にいつまでも逃げ続けられるとは思えない。

『……一つだけ、アドバイスをやる。グレンだけだ』

「【愚者】、だけ？」

『グレンだけが、この状況を打破できる』

この場に居ないグレンがキーマンであることを口にしたセリカは、グレンとルミアの二人を連れてどうにか陛下の前に来ることを伝えて、一方的に通信を切った。

「どういう事だ……?」

グレンが、ルミアを救う決め手?

グレンに出来て、シュバルゴに出来ないこと。

「魔術起動の封殺、だったか」

帝国宮廷魔導師団、特務分室の执行官ナンバー0【愚者】の代名詞、固有魔術【愚者
オリジナル
の世界】。

それぐらいしか思い浮かばない。

だが、なんの為にそれが必要になるのか?

わざわざリスクを侵して女王陛下に会う理由は?

分からないことだらけだが、セリカは無意味なこととは言わない。

ならば、次の行動はグレンとの情報共有だ。

グレンに繋がる方の宝石を起動しようとして——。

「……ッ」

ゾクリと、全身が泡立つような感覚。

天の智慧研究会に所属していた頃に何度も感じた殺気。

感じた方を見て身構えた時には既に遅く。

解き放たれた雷閃が、通信の魔導具を砕く。

「……冗談だろう」

グレンの元鞘、特務分室所属の魔術師二人。

「【星】に、【戦車】……!」

「シュバルゴ―モータナス。その娘を此方に渡してもらおう」

「……従わなければ、斬る!!」

「敵は、親衛隊だけではなかったか」

本当にまずい事態になった。

特務分室の凄腕魔術師二人……それも、遠距離狙撃のエキスパートと、近接戦闘を得意とするイルシアのコピー体。

逃走は不可能、抗戦は敗北必至。

大人しく捕縛されるのも論外。

残された選択肢は一つ。

「……一つ、聞きたい。貴様達は、ルミアをどうするつもりだ?」

対話、そしてルミアを害そうとするならば説得。

時間稼ぎだと思われて構わず襲ってくるようならば詰みだ。

警戒を緩めることなく疑問の回答を待つ。

だが、王室親衛隊とは違って話すくらいはするらしい。

剣を手にして今にも襲いかかってきそうな【戦車】……リイエルの後ろ髪を掴む【星】……アルベルト。

「なぜ、そんなことを聞く?」

「……決まっている。ルミアを護るためだ」

「何……?」

アルベルトはシュバルゴの言葉を吟味する。

ルミアの正体は事前に情報を得ている。

女王陛下の娘、エルミアナ王女。

アルベルトはここに至るまで、シュバルゴがルミアを攫おうとする研究会の手下人であり、その情報を得た親衛隊が二人を追っていると考えていた。

そう考えればルミアの親であり王族であるアリシア女王を保護する名目で拘束することにも納得が出来るし、もう一つのアルベルトたちの任務——内通者の特定もそのような人物は実際には存在せず、気配遮断系統の凄腕魔術師であるシュバルゴが潜入して情報が漏れていたと考えられたから。

だが、実際はどうだ。

シュバルゴはルミアを護ると宣い、それが苦し紛れの時間稼ぎだとは、現在進行形で攫われているはずのルミアが抵抗することも無く、大人しくシュバルゴの背後に隠れて

いることから考えづらかった。

「ここまで考えて、アルベルトが出した答えは——。」

「離して、アルベルト。斬れない！」

「待て、リエル。……一度話を聞こう。もしかしたら、俺達は……俺は、何か勘違いをしているかもしれない」

対話に応じる選択だった。

#

「……王女に一目惚れ、研究会脱退、今はセリカⅡアルフォネアの小間使い……?それを信じろと?」

「信じるかどうかは貴様ら次第だろう。オレから言えることは既に答えた。——」ど
うしても信じられんと言うなら、【魔術師】……イヴⅡイグナイトにでも聞くがいい」

「イヴだと?」

「数年前に【魔術師】を解任させられそうになったのは貴様も知っているだろう。アレはオレが、王城からルミアを脱出させる任務で、護衛をしていたイヴⅡイグナイトを動かしたせいだ。オレが研究会を裏切る過程も見ている」

アルベルトが通信の魔導具を取り出し、呼び出しをかける。

忙しいという訳でもないのか、案外すぐに繋がった。

『……アルベルト？ 貴方は今、フェジテでの任務のはずよね。何かあった？』

「……シユバルゴ―モータナスに遭遇した」

『……………ああ、なるほど。そこに居るのね？ だったら、少しでも代わってもらえる？』

アルベルトはそれで察した。

シユバルゴに対する捕縛命令が初っ端にない時点で、少なくともイヴ視点ではシユバルゴと天の智慧研究会は繋がっていないということに。

アルベルトがシユバルゴに魔導具を投げ渡す。

「……………なんだ」

『なんだ、じゃないわよ。本当に、余計な仕事を増やさないで欲しいんだけど』

「オレの行動が、貴様の仕事を増やす原因なのか？」

『当たり前でしょう!! 今まで平穩に暮らせていたのが、不思議に思わなかったの!?! 貴方、一応顔写真付きの指名手配犯なのよ!?! それで、顔も変えずに買物行ったりしてたら通報されるに決まってるでしょう!!』

……………単純に失念していた。

セリカの邸宅に居候する最初の頃はキチンと魔術で顔を変えたりしてはいたのだが、ある日帰った時に見知らぬ人だと勘違いしたルミアに涙目になられてからはすっぱり

やめていた。

それから何事もなく平穩に生活出来ていたから、顔を隠さずとも問題ないと勘違いしてしまつたのだ。

『貴方が通報される度に毎回揉み消す私の身にもなつてほしいわよ。……それで、今度は何をやつたの?』

「……」

『まあ、アルベルト達がいるし、何となく想像はつくけれどね。アルベルト達の任務は王室親衛隊の調査と王室内の内通者の特定。王女と一緒に行動していた貴方は未だ指名手配犯で気配を断つことにおいてはスペシャリスト。王城に潜伏して内情を横流しし、王女を攫う研究会の下手人だと勘違いされたつて所でしょう?』

持つている情報のみでシュバルゴ達の現在の状況を言い当てた。

やはりイヴの考察力は今までシュバルゴが出会つてきた人の中でもトップクラスであり、持ち前の指揮能力もこの考察力あつてこそなのだろう。

情報戦においてもイヴであれば最高の戦果をあげるだろうと想像できるが故に、彼女を勘当しようとしたイグナイト家の株がシュバルゴの中でさらに下がった。

「概ね合っている。……今分かつていることは——」

シュバルゴとルミアがここに至るまでを特務分室の三人に話す。

王室親衛隊によるルミアの処刑宣告、セリカの行動制限と助言。

情報が少なすぎる為に、現時点では親衛隊の動機もセリカの意図も不明だが、一応やることははつきりしていた。

『魔導具が破壊されてグレンへの連絡手段が無くなった以上、直接会って話さない事には協力は得られない。でも、親衛隊もルミアの所属クラスの人物からは絶対に目を離さないでしょうね』

「ああ。そうなると、グレンのもとへ向かう二人と親衛隊を攪乱する二人で別れるべきだろう」

グレンとルミアが揃って女王陛下の前に来る事を伝えられたため、ルミアはグレンのもとへ向かうことに決定。

グレンに説明するためにアルベルトかシュバルゴのどちらかは必須なため、リエルは攪乱グループに。

あとはアルベルトとシュバルゴだが……。

『……シュバルゴが攪乱に回った方がいいわね。親衛隊にはシュバルゴの名は割れているし、得意魔術も知られている。二人ともある程度の軍用魔術を使えるオールラウンダーとはいえ、『セルフ・イリユージョン』で姿を変えて戦ってシュバルゴではないと思われたら面倒なことになる』

「成程。オレに異論は無い」

こうしてイヴの采配によって、アルベルトとルミアがグレンとの合流に、シュバルゴとリエルが親衛隊の攪乱に向かうこととなった。

白魔【セルフ・イリユージョン】でルミアはリエル、リエルはルミアの姿に変身し、行動を開始した。

第十七話

「あの、先生」

「……どうした？」

「ルミアとシユバルゴさん、全然戻ってきませんね」

午後の部が始まって数十分。

一つの競技が佳境に差し掛かったところで、システイーナが心配そうな表情でグレンに声をかけてきた。

「……確かにな。あいつもいるし、何事もないとは思うんだが……何故だか、王室親衛隊が何かを警戒するように俺たちを見張ってる」

「そうなんですか？」

午前中も警備の目は厳しかったが、午後になって明らかにグレン達二組が集まるスペースに対する警戒度が上がっている。

生徒たちには勘づかれてはいないが、元帝国宮廷魔導師団員であるグレンは気づいた。

少し前からなにか進展があったのか、最低限の人員を残して慌ただしくどこかへ向

かつていく所まで。

「それに……セリカのやつが全く笑ってねえ。午前は陛下と楽しく談笑してたはずなのに」

「……言われてみれば、アルフォネア教授、険しい表情してますね」

午前中は遠くから見てもわかるぐらい、心底楽しそうにしていたセリカが今では騒ぐ様子もなく大人しくしている。

何故グレンが事ある毎にセリカを見ていたのかという疑問がシステイーナの脳裏に過ぎるが、取り敢えず問わずに飲み込む。

「何をするにしても情報が足りなすぎる。そもそも警戒度が上がっている原因がシユバルゴ達だという確証もないし、待ってたら戻って来る可能性もある」

「そう……ですね」

グレンの言葉に、それでも不安そうな表情を崩さないシステイーナを見兼ねて、グレンはシステイーナの頭をぐしやぐしやと撫でる。

「な、何するんですか!」

「はは、まあ、お前がそこまで不安になることじゃねえよ。本当に何かがあったとして、協力が欲しい時は連絡が来るだろ」

グレンは通信の魔導具を見せびらかしながら、そんなことよりも、と言葉を続ける。

「お前が今やるべきことは、この後の競技に集中することだ。……俺の給料がかかってるんだ、マジで頼むぞ!」

「……ふふ、分かりました!先生は大船に乗ったつもりでいてください!絶対、負けませんから!!」

システイーナの不安をある程度払拭できたと感じたグレンは、手洗いに行つてくると言い残してその場を去る。

用を足して戻ろうとしたグレンだったが――。

グレンの進路を遮るように、二人の男女が現れる。

「久しぶりだな、グレン」

「……」

「な、お前ら……アルベルトに、リエル!」

グレンにとっては元同僚。

古巣の凄腕魔術師二人が、グレンの前に現れた。

#

「成程、二人は無事なんだな?」

シユバルゴとルミアの置かれている状況、セリカから託された解決方法……。

人がいないことは確認したが警戒しておくことに越したことはないため、共有した情

報は簡潔に最低限ではあるが、グレンのやることは決まった。

「陛下に近付く方法だが、一つある」

「……話せ」

「なあくに、簡単だ。俺のクラスが競技祭を優勝すれば、表彰式で会える。今回は陛下自ら優勝クラスを祝ってくださるからな。表向き何も起きていないことにしたいだろうし、護衛の目は多くなるだろうが中止にはしないだろう」

そして今、グレンのクラスは三位である。

それも、一位と二位もあまり点に差がない。

「アイツらも頑張ってくれてる。このままいけば、十分優勝を狙えるはずだ」

勿論、絶対に優勝出来ると断言出来る訳では無い。

だが、グレンは自身の指導の下でこれまで必死になって練習をしてきた生徒たちの姿を知っている。

優勝出来ると信じられるぐらいには、全員上達しているのは間違いないのだ。

「そうと決まれば、少しでも勝率をあげに行かねえとな」

「俺達も同行しよう」

「ああ。……にしても、シュバルゴは今、リエルと一緒にフェジテを駆け回ってるのか

……。大丈夫なのか？」

「……分かん。大丈夫だと思いたいが、奴の思考回路は理解不能だからな。……あの【墮ちた剣】も手を焼いているかもしれんな」

散々な言われように、リエルに扮するルミアは苦笑いするしか無かった。

#

その、ボロクソに言われていたリエルと心配されているシュバルゴは今。

「おい、【戦車】」

「……ん、何?」

「貴様、少しでも協力しようという気は無いのか……!?!」

親衛隊の追跡から逃れるためにルミアに扮するリエルを担いで奔走するシュバルゴだが、二人の息が合わず中々振り切ることが出来ない。

リエルが錬金術以外の魔術は全くコントロール出来ないことを知らないシュバルゴは、走りながらリエルに苦言を呈する。

「なにか使える魔術はないのか?」

「ん、剣を出せる」

「……ああ、それは予想が着く。他は?」

「……………建物水を水にできる」

「錬金関係以外では無いのか？」

シュバルゴはリエルがイルシアのコピー体である事を知っている。

故に、剣の高速錬成が可能であることは予想ができた。

そこから派生する錬金術が得意であることも。

ただ、仮にも特務分室の執行官であるリエルが、基本三属の魔術ですら満足にコン
トロール出来ないだなんてことは想像出来ていなかった。

コピー元であるイルシアについて知っていることも、特別接点があった訳ではなかつ
たために少ない。

研究会直属の暗殺集団の中でも、より優秀な人物だったということくらいしか。

だからこそ、「使えるけど当たらない」という回答を聞いた時は耳を疑った。

「……貴様、それでよくこれまで任務をこなしていたな」

「私は毎回突っ込んでただけ。だから、私からシュバルゴに提案がある」

「一応、聞いてやる」

「逃げるなんてまどろっこしいことするのはやめて、私が敵に突っ込んでその後ろから
貴方が突っ込む作戦に変更した方が——」

「却下だ」

「……………」

「……………」

あんまりなりイエルの提案に頭を抱えるシユバルゴは、この采配をしたイヴを恨んだ。

#

魔術競技祭、閉会式。

自信なさげでもグレンのアドバイスを信じて勇気を出して競技に望んだリンや、得点配分が高い『決闘戦』を勝ち抜いたシステイナーナ、ギイブル、カツシユの三人等。

午後の部の競技に参加した生徒たちの奮戦の結果、二組は優勝……一位を勝ち取った。

式は肅々と進み、ついに表彰台にアリシアが立つ。

その背後には王室親衛隊総隊長のゼーロスと、学院が誇る第七階梯の魔術師セリカが控えている。

優勝クラスへの勲章の下賜。

代表者として歩みを進めるのは、担任であるグレンと……競技場内の大半の人々には見覚えのない青髪の少女。

「お久しぶりですね、グレン。それと……………リイエル？」

「陛下もご壮健そうで何よりです」

「……」

学院の生徒とは関係が無いはずのリエルの存在に首を傾げるアリシアに、久方ぶりに会ったグレンが膝を着いてリエルもそれに倣う。

そんな二人に近づくのはゼーロスだ。

「表彰の前に一つ聞きたいことがある、魔術講師。貴様は、ルミアⅡティンジェルの現在の所在を知っているか？」

鋭い眼光で睨みながら、グレンに問いを投げかけるゼーロス。

そんな彼に答えたのは、グレンではなく。

「私は、ここに居ます」

白魔【セルフ・イリュージョン】を解呪して変化する少女の姿。デイスベル

現在、フェジテの街で親衛隊が血眼になって追っているはずの少女——ルミアⅡティンジェルが、そこに居た。

瞬間、セリカによって結界が施される。

音も遮断する断絶結界。

まるで二人を絶対に逃がさないとでも言うような強力なものだが、グレンは慌てる様子もなく。

「さあ、馬鹿騒ぎも終わりにしようぜ？」

ルミアの出現に呆気にとられている間に行動を起こすグレン。

不敵な笑みを浮かべながら懐から取り出したのは、愚者のアルカナ。

グレンに出来て、シユバルゴには出来ないこと。

起動する【愚者の世界】。

一定範囲内における魔術起動の完全封殺が成ったこの場で、それを理解したアリシアが気を持ち直し、その首にかけられていたネックレスを外して地面に捨てる。

この行動に動揺するゼーロス、大声を上げて笑うセリカ。

そして、自身の容態に何も変化がないことを確認するアリシア。

「やるじゃん、流石私の息子！良く分かったな！」

「いや、まあ……俺に出来てあいつに出来ないことなんざ、これぐらいしかねーだろ」

「ま、確かなな！だが、即発動してくると思つてなかつたから肝を冷やしたぞ。さすがに周囲の人間にアリスの現状を知られる訳にはいかなかったからな」

アリシアよりも前に出てきたセリカにバシバシと肩を叩かれるグレン。

その表情は満更でもなさそうだった。

「どういう、事だ？」

「俺の固有魔術^{オリジナル}だ。効果は自身を中心とする一定範囲内における魔術起動の完全封殺。陛下がネックレスを捨てたことから察するに、それ、条件起動型の呪殺具^{カース}だったんだろ？条件を満たしたら起動する呪いも魔術に変わりはない。俺の【愚者の世界】の範囲内では、条件を満たしても起動しないってことだ」

一息に言いきったグレンがその場に座り込んで。

「んで、どうするんだ、これ？收拾つくのか？」

緊張の面持ちでアリシアと話をするルミアを眺めながら、事後処理の心配をするのだった。